

ANIMAGE BUNKO
"JuJu"



「風の谷のナウシカ」
イラスト・なにわ♡あい



# シュナの旅

AM JuJu

宮崎 駿

シュナの旅

宮崎 駿

アニメージュ文庫V-028

Ⓟ390

徳間書店
アニメージュ文庫　定価390円(本体379円)
ISBN4-19-669510-8 C0174 P390E(1)



## 宮崎 駿(みやざき はやお)　シュナの旅(たび)

1941年
東京都生まれ



学習院大学政経学部卒業後、東映動画へ。「ホルス」「長靴をはいた猫」などに場面設計、原画として参加。その後「ルパン三世」「未来少年コナン」「カリオストロの城」などの演出を担当し、現在に至る。アニメーター1年目の23歳のときに見た「雪の女王」(ソ連)を〝好きな作品〟と話す。

# 宮崎駿関連作品リスト

シュナの旅

風の谷のナウシカ絵コンテ [1] [2]

あれから4年…(カリオストロの城)

また会えたね！（未来少年コナン）

名探偵ホームズ [1]～[6]

「名探偵ホームズ」ゲームブック ウィザード家の秘宝

「ホルス」の映像表現

作画汗まみれ

小説 天空の城ラピュタ（前篇）（後篇）

小説 となりのトトロ

「天空の城ラピュタ」ゲームブック 天界の迷宮

「風の谷のナウシカ」ゲームブック 巨神兵を倒せ！

「となりのトトロ」もののけ通信

カバーイラスト＝宮崎駿
カバーデザイン＝真野薫
カバー印刷＝真生印刷㈱

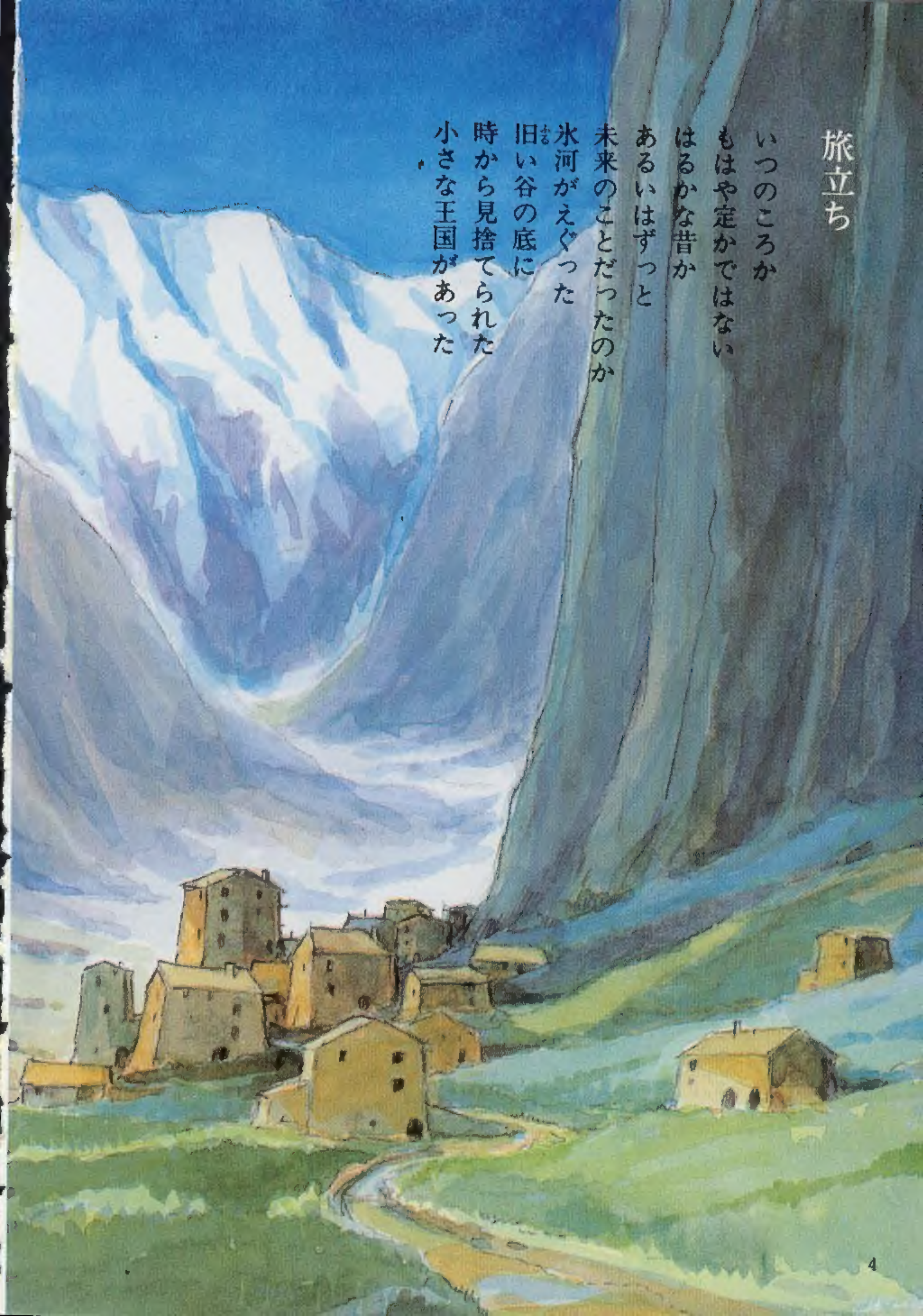
# シュナの旅

宮崎　駿

# シュナの旅



宮崎 駿



## 旅立ち

いつのころか
もはや定かではない
はるかな昔か
あるいはずっと
未来のことだったのか
氷河がえぐった
旧い谷の底に
時から見捨てられた
小さな王国があった





人はなぜ<br>
こんな土地に<br>
住みついたのだろう

山から吹きおろす風は<br>
うすい空気を<br>
さらにうすくし<br>
陽の光も<br>
谷をあたためてくれない



乾いた土をひっかいて
ヒワビエの苗を植えても
やせた大地は
わずかな実りすら
出ししぶる



ヤックルは
とぼしい草にいつも飢え
なかなか子を産もうと
しない……

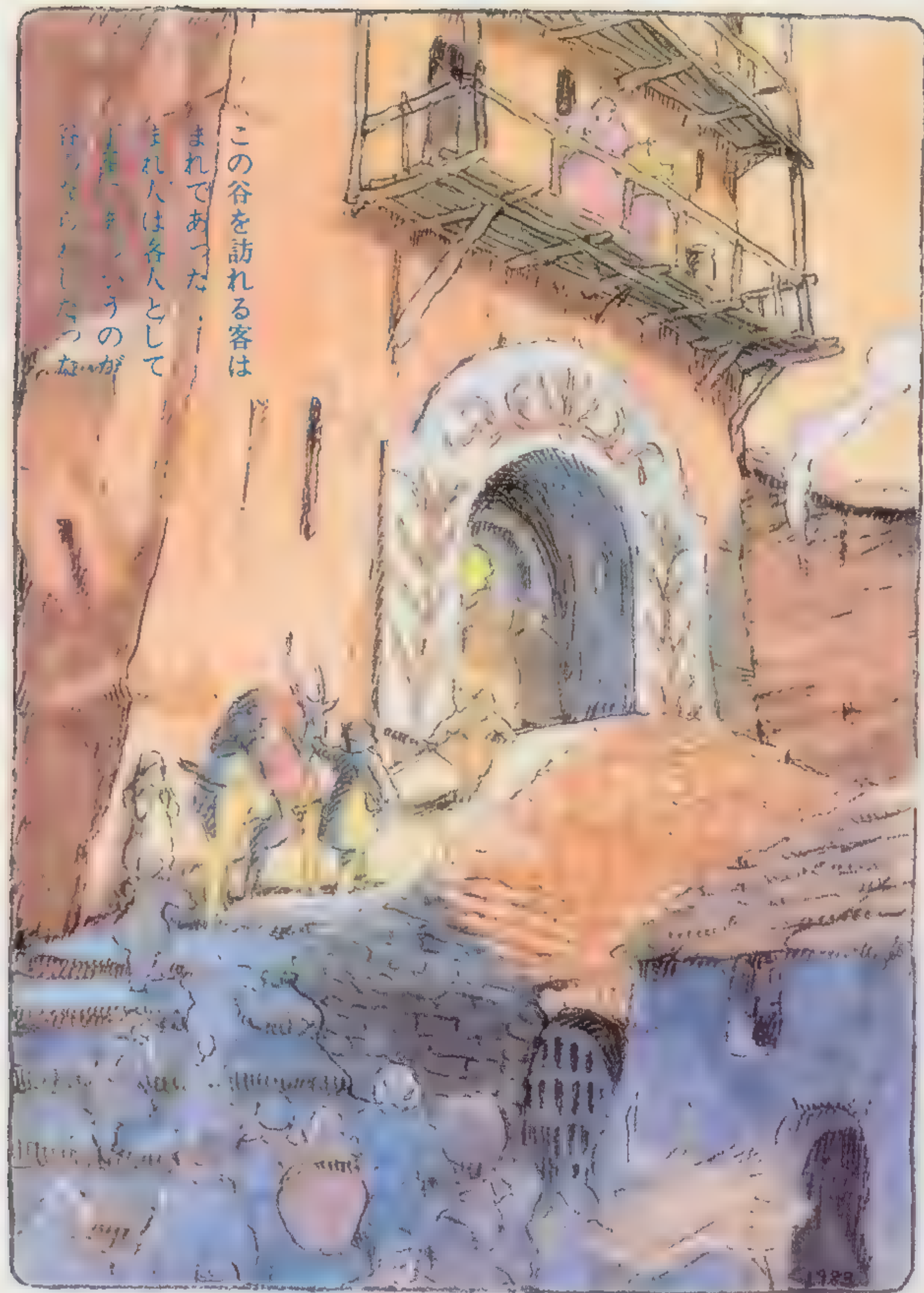
それでも　人々は
ささやかな収穫に
感謝して生き……

くち果てるまで
働いて
死んでいく……

なんて
悲しく 貧しい
人生だろう

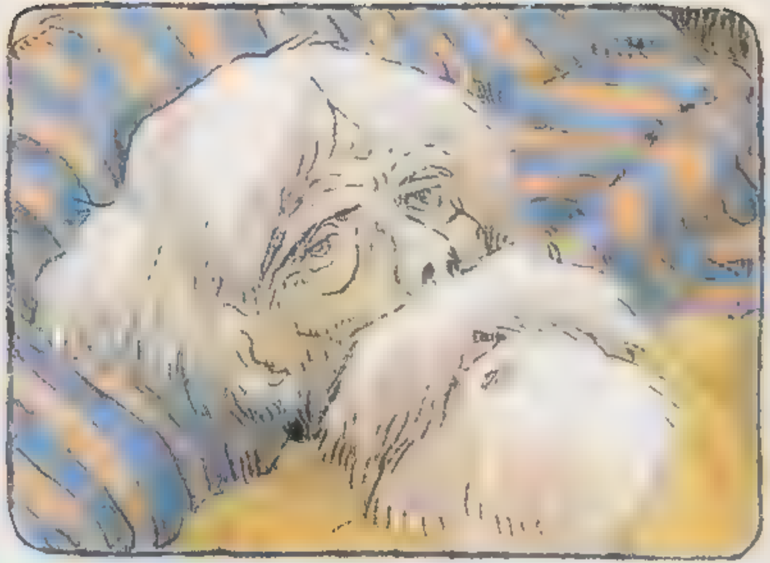
彼の名はシュナ
長じてこの王国を
父から受け継ぐべき者
だった

見たことのない服装の
異国の男は
疲労と飢(うえ)で
死にかけていた


この谷を訪れる客は
まれであった
まれ人は客人として

谷いちばんの
おばばのまじないと薬草でも
もはや旅人の生命を
つなぎとめることはできなかった





旅人は　シュナを
死の床にまねいた
「わたしは
この地のはるか東方にある
小さな国の王子だ
国は貧しく　民はいつも
飢に苦しんでいた」

「そなたのように
若かったある日
わたしは　ひとりの
旅人と出会った」

男は首にさげていた
小さな袋をとり出し
シュナに示した



袋には　シュナの見たことのない
実が入っていた
「その旅人がわたしにくれたものだ
この穀物さえあれば
人民はけっして飢えず
豊かに平和に暮らせると……」
その実は大きく　重かった

西の彼方
大地果つるところに
黄金の穀物が
豊饒の波となって
ゆれる土地が
あるという……

シュナはいう
「わたしたちのヒワビエの実は
小さく貧しい
この種をもらえまいか」
「あげてもよい　が
これを地に播いても無駄だ……
この実は殻をむかれて
すでに死んでいる
生きている種は　金色の殻に包まれ
美しく輝いていると聞いた……
わたしは
人民の苦しみをのぞきたいと考え
今日まで金色の種を求めて
旅をつづけて来たが
もはや年老い……力も尽きた……」



父や長老たちは心を痛め　シュナをさとした
「貧しくとも　それがわれらに与えられた天命なら
この地に抱かれて埋もれるのも人の道だ」と……

しかし　旅立つときが来た若者を　だれが
押さえられよう……長老たちは深く嘆息した

女たちはいつもの狩りにしては　多すぎる弾丸の数を見て
シュナの決意が固いのを知った


まった新月の夜
ナは掟を破って
クルに鞍をおいた



# 西へ

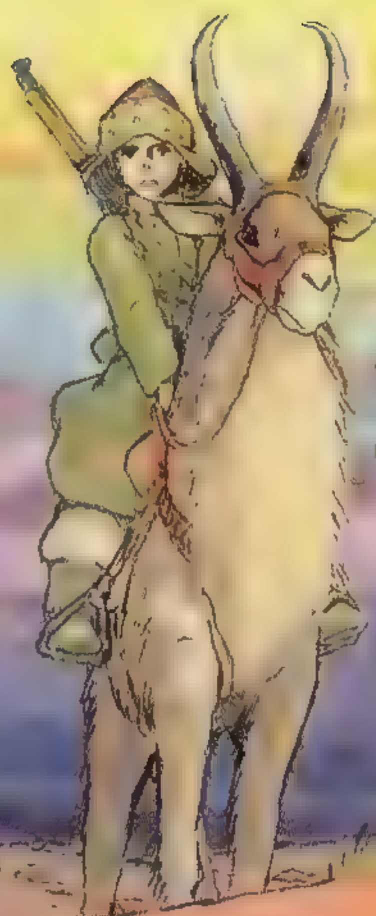
大地がくさって穴となり
錆の浮いた水面が
どこまでも　つづいていた
風が　かぎなれぬ異臭を
運んで来る
何日も何日も
生きるものの姿を見ずに
シュナとヤックルは
西へと歩んだ

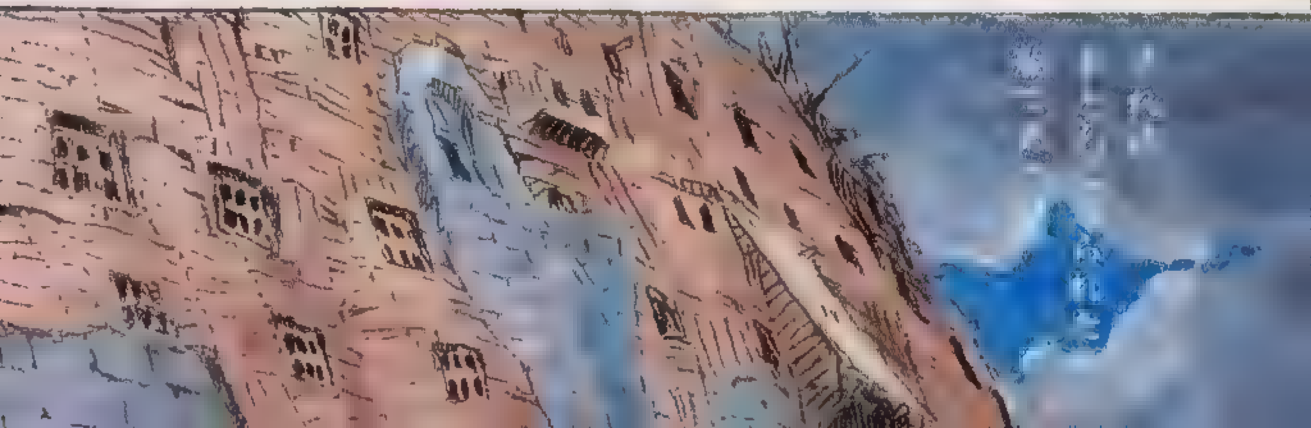


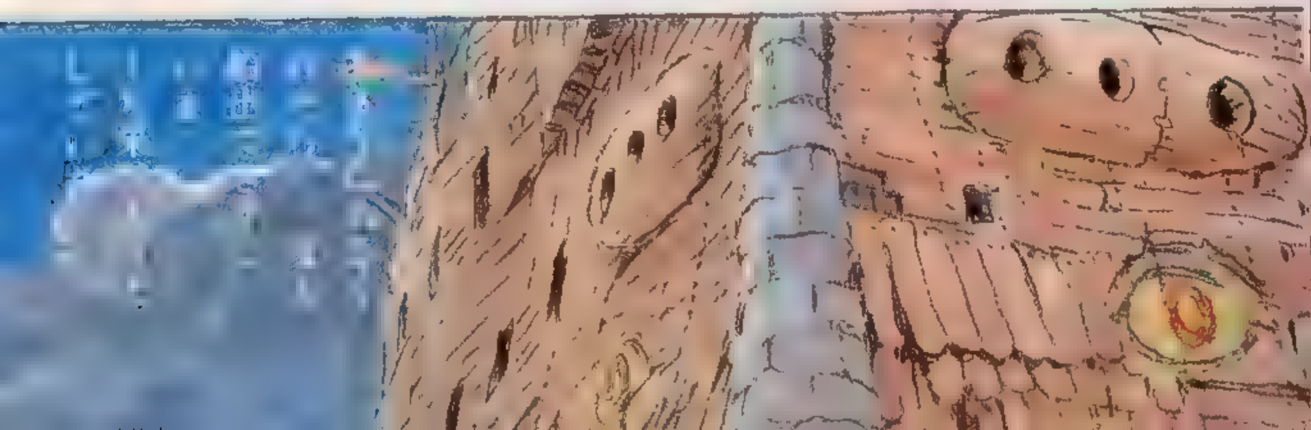



人々の遺した
ものたちが
時の流れへ
葬ろうとしている…

谷を出てひと月めに
シュナは　はるか地平線に
立ちのぼる人煙を見た














旅で難儀をしている者ですひと晩の宿と食物をお願いできませんか

背筋を冷た
走った

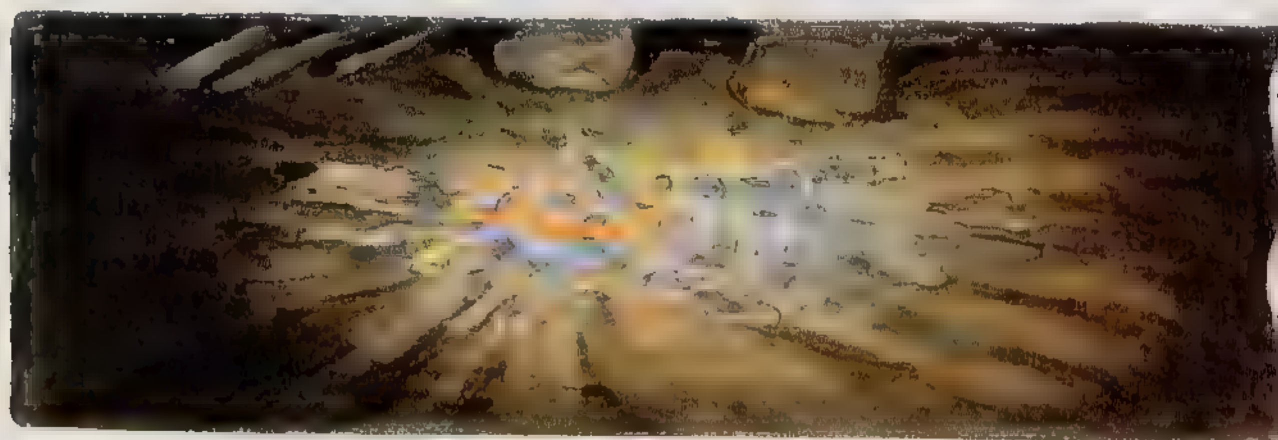


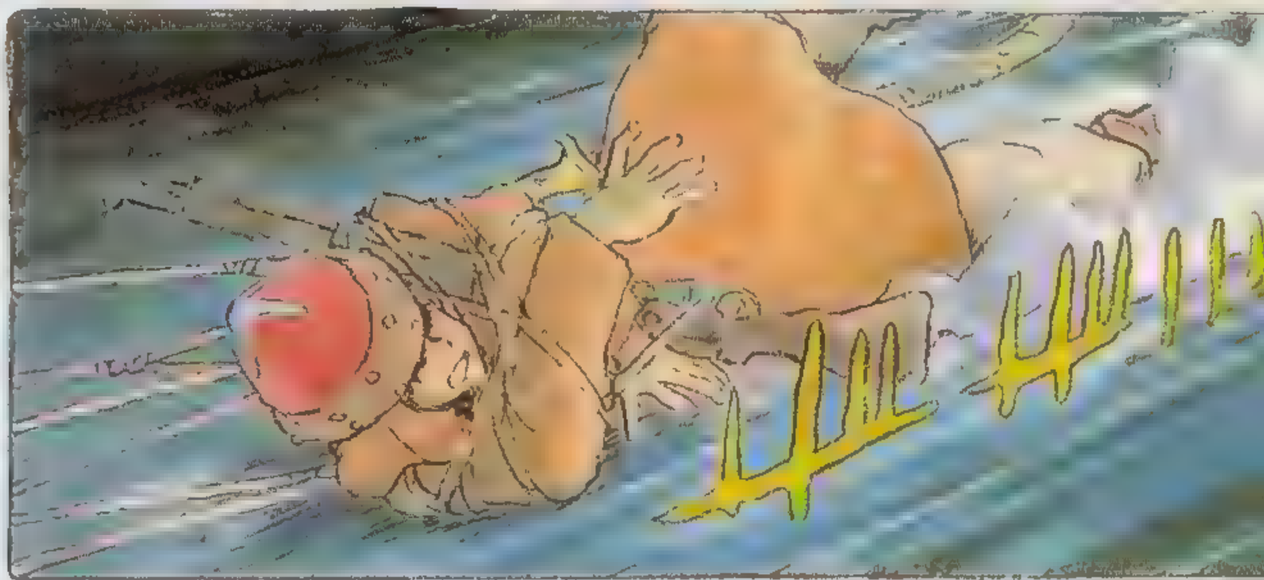

散乱していた骨片は
明らかに人のものだった
焼かれて割られ
中の髄をすすった跡があった

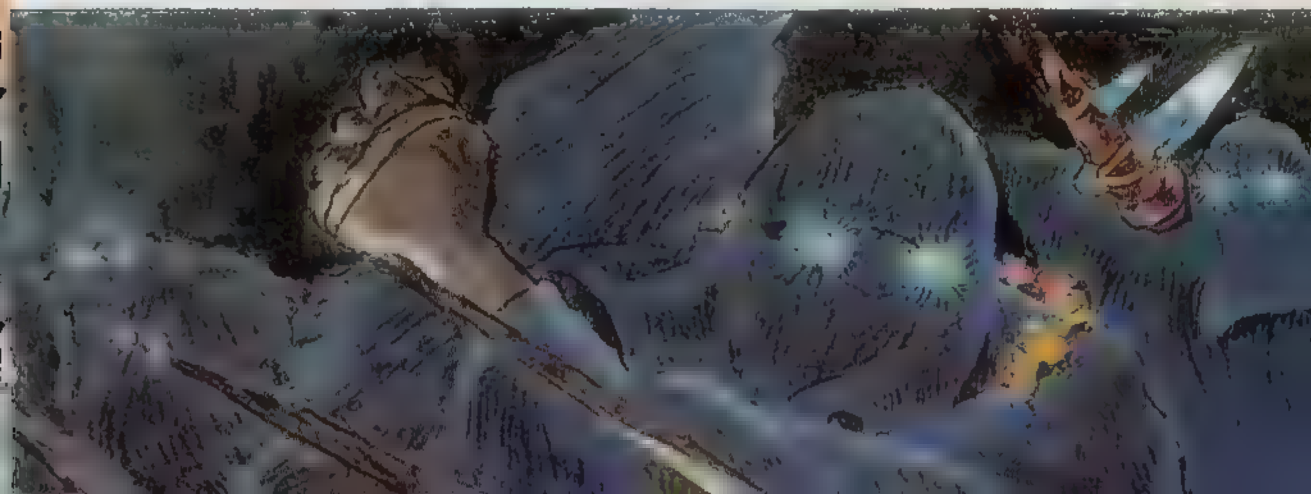


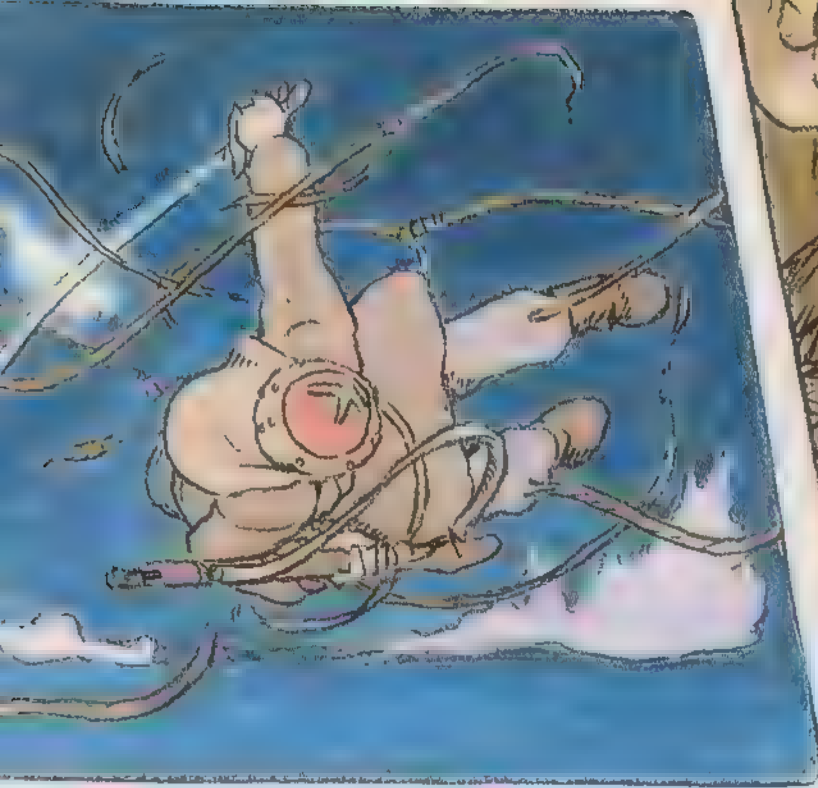
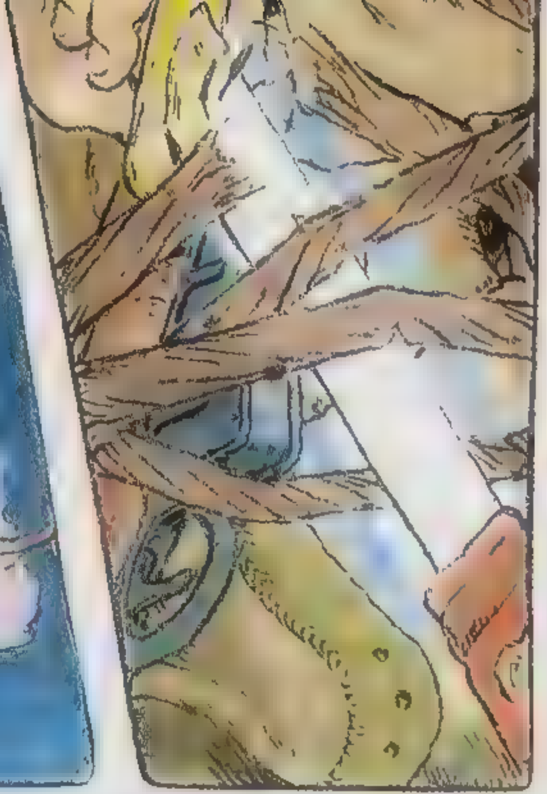




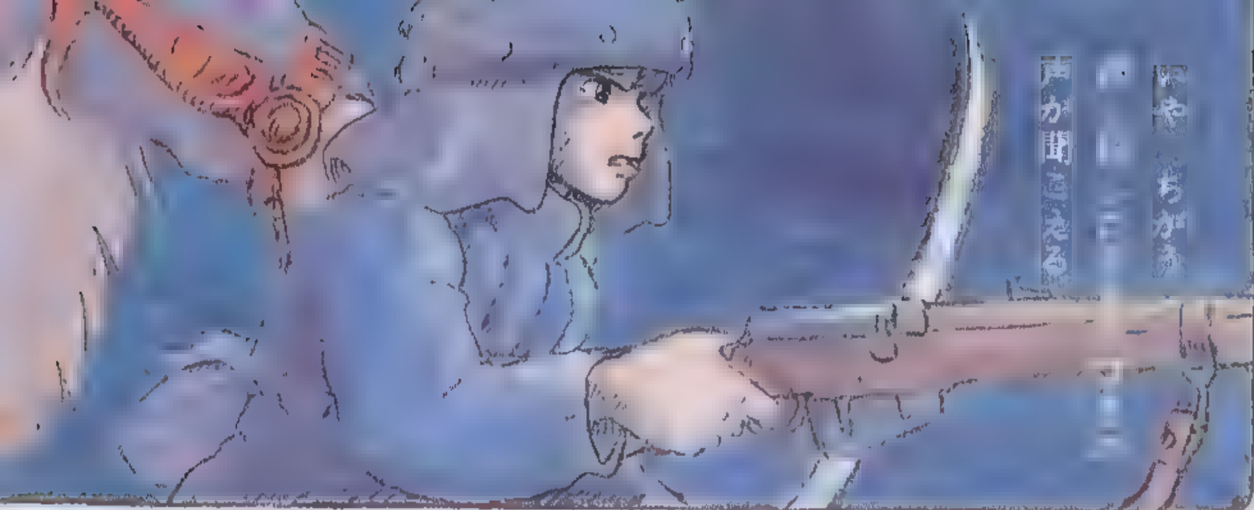


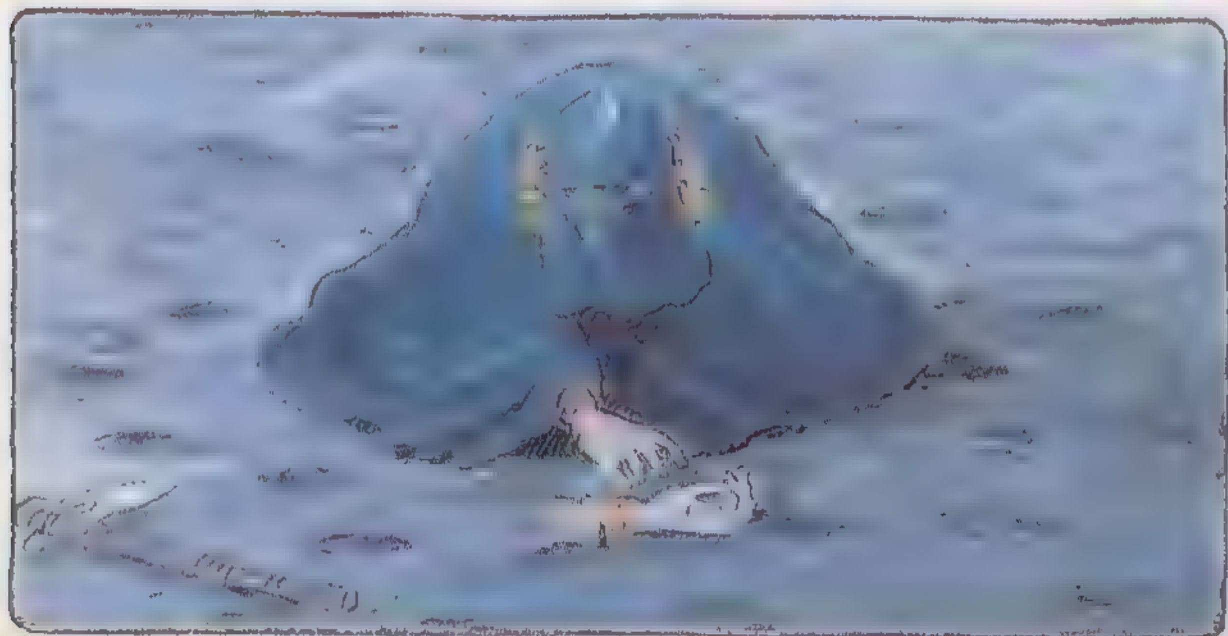




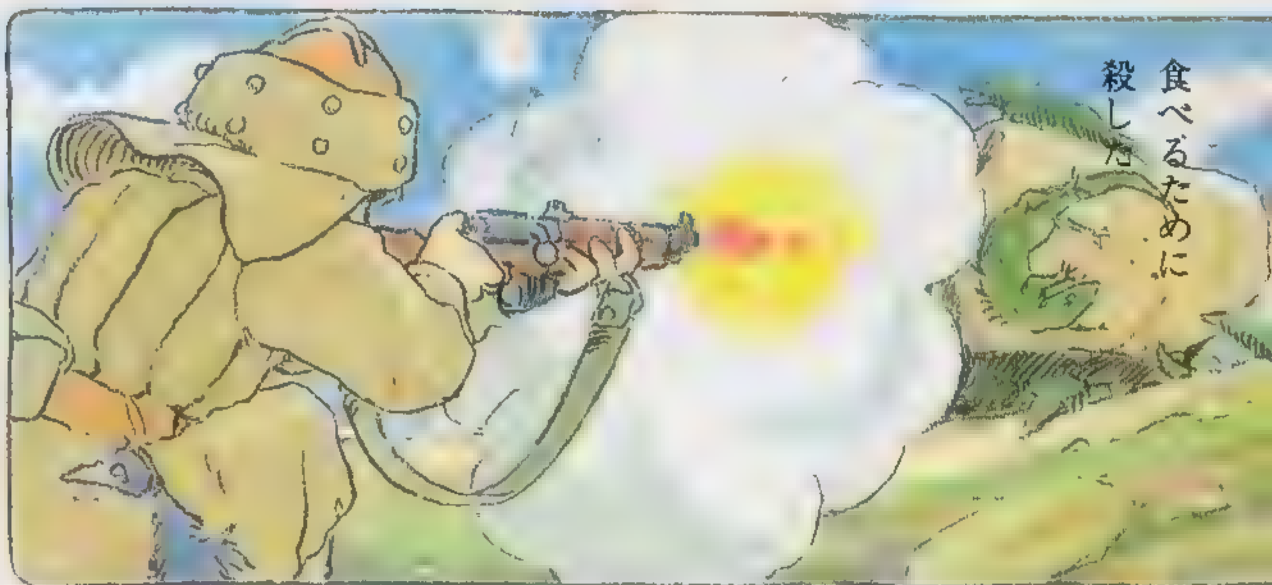



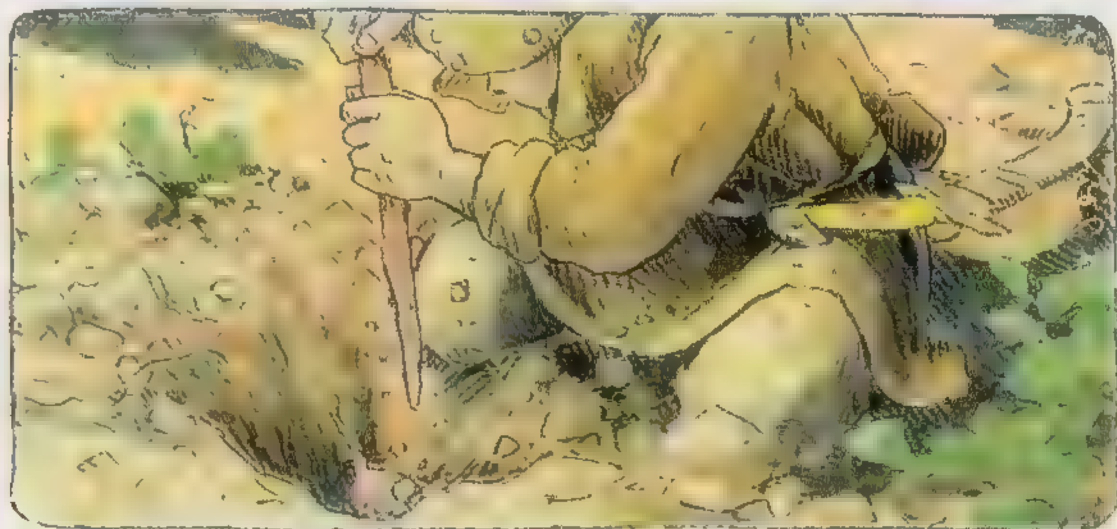
来たときと同じように
襲撃者たちは
音もなく去った


いや、ちがう
声が聞こえる







生きのびるために
多くの努力を　費やさねば

谷から持って出た
食糧は尽き
シュナとヤックルは
飢えた




空気が濃くなった
やがて
放棄された
村々をいくつも
見るようになった




畑の作物は
すっかり野生にもどり
ヒワビエよりも
貧弱な実しか
つけなくなっている

求める種は
ここには
ない……



さらに　西へ進むうちに
シュナは　駄獣のひく
大きな車と出会った
しかし　道をたずねても
男たちは　旧式なシュナの銃を
あざ笑うだけで
返事を返しさえしない
装甲された車両からは
異臭がただよって来る
積荷を見て　シュナは
衝撃をうけた



押し込まれているのは
人間たちだった
いったい　何があったのだろう

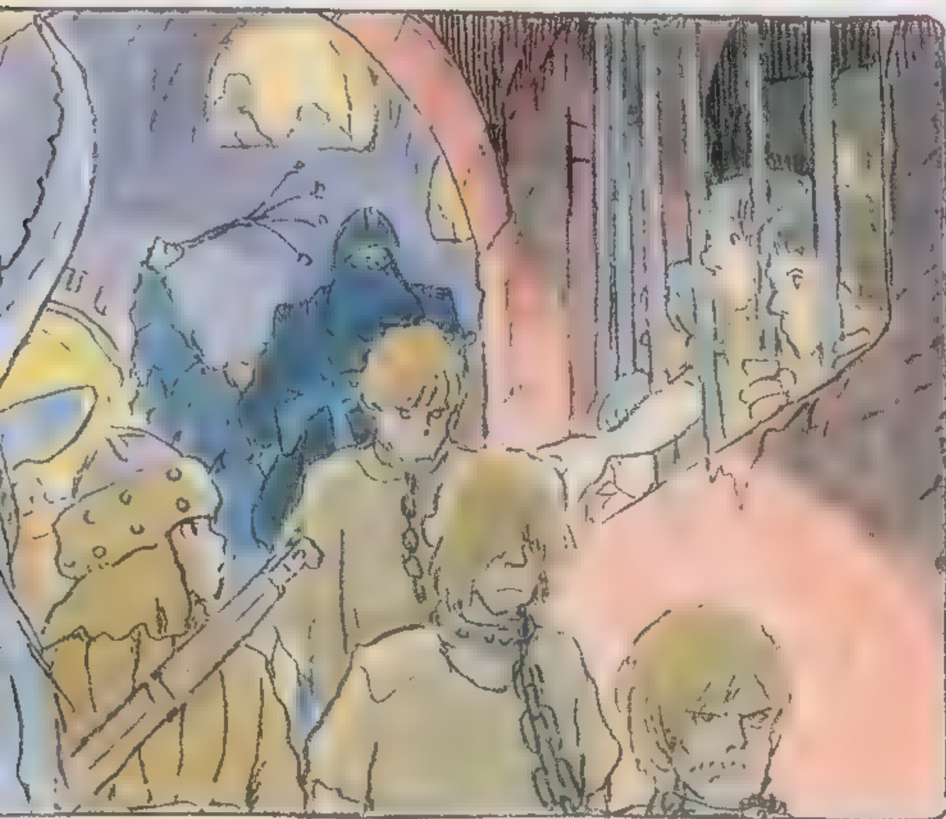
同じような車と
何台もすれちがううちに
荒れた平地に広がる町が見えてきた



都城（とじょう）にて

四方に開かれた
大門を
車や人が
しきりに
出入りしていた


林立する塔は
崩れ始めていたが
城内は　シュナがはじめて見る
にぎやかさだった



なんということだろう…… この町で
取引されるおもな商品は 人間なのだ

こんなところに求める種が　あるはずはない

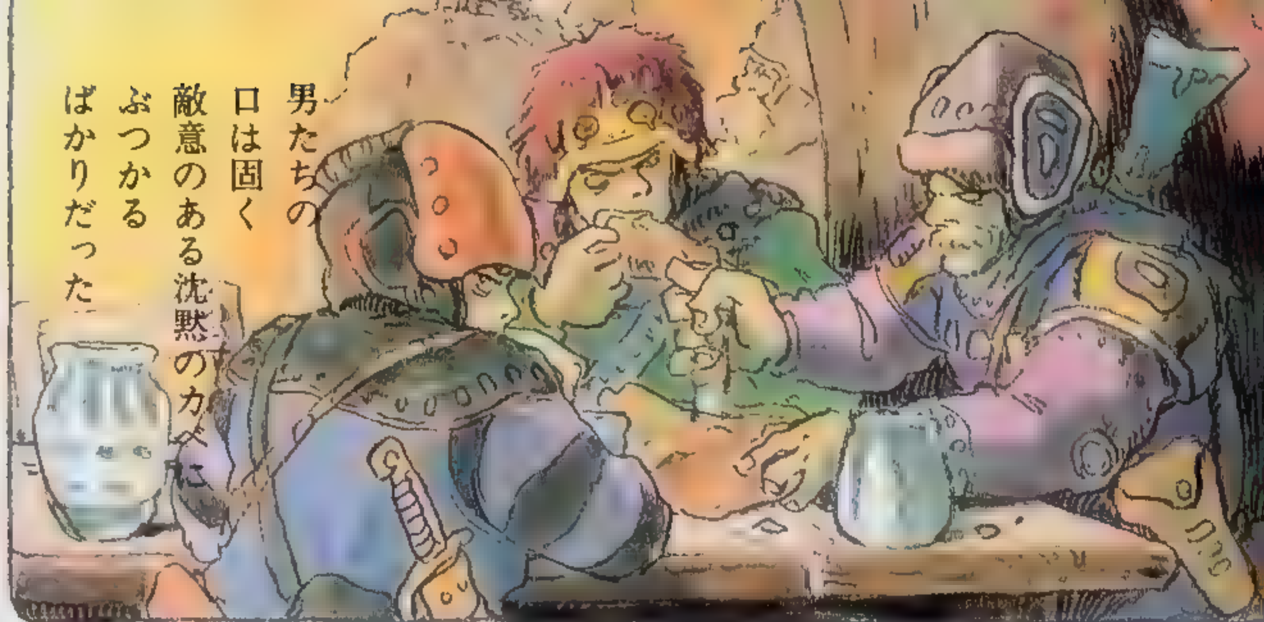
食糧を手に入れたら
すぐにここを
立ち去ろう

シュナが
剣の柄飾りの宝石を見せると
商人の態度が急に変わった
店先には　種々の穀物や豆が
山をなしている



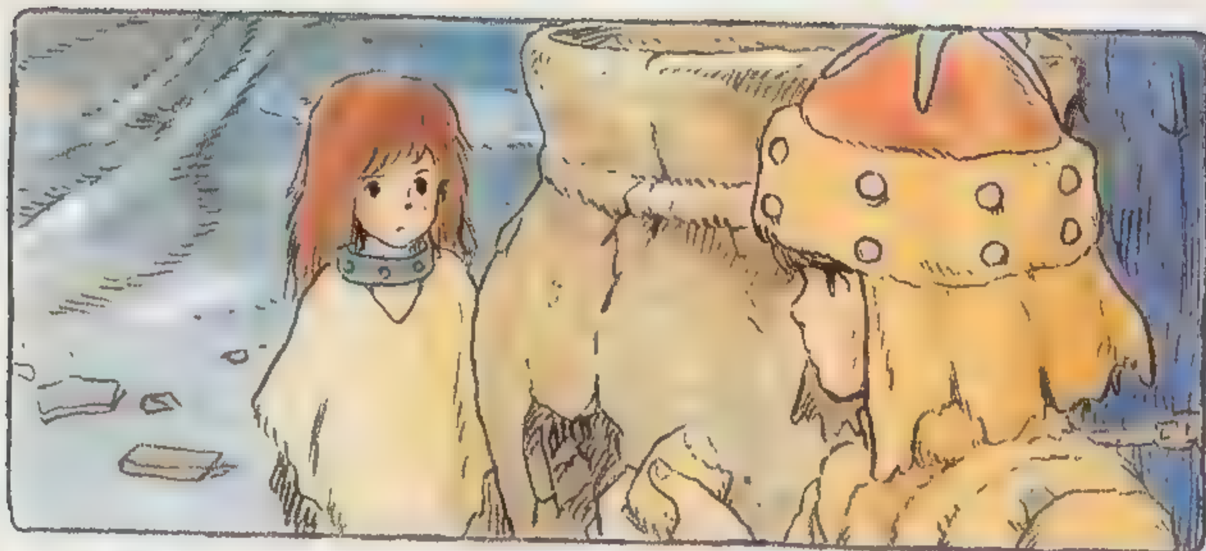


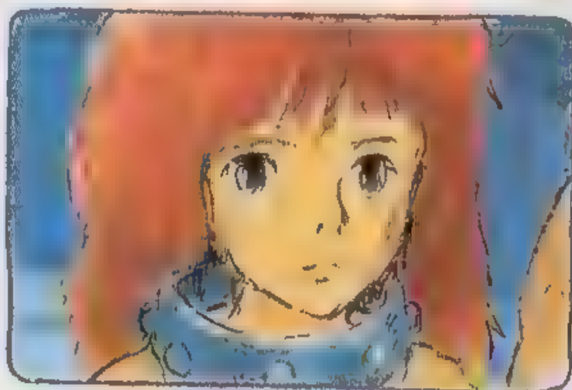
シュナの目は　山のひとつに釘づけになった
探し求める実がそこにあったのだ
しかし　すべて脱穀され　死んだ実になっていた
シュナは商人に　生きている種はないかとたずねた
「畑などやる者はもういないよ
麦なら必要なだけ　他所から手に入るようになってるからな」
「では　その麦を作っている場所は？」
「人買いどもが　人と交換に持ってくる　人買いに聞くんだな」

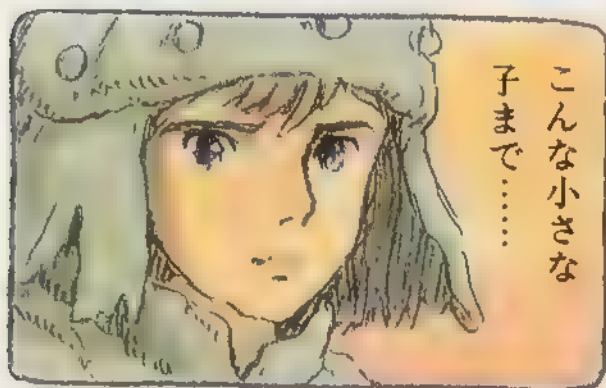



シュナは
疲れた……

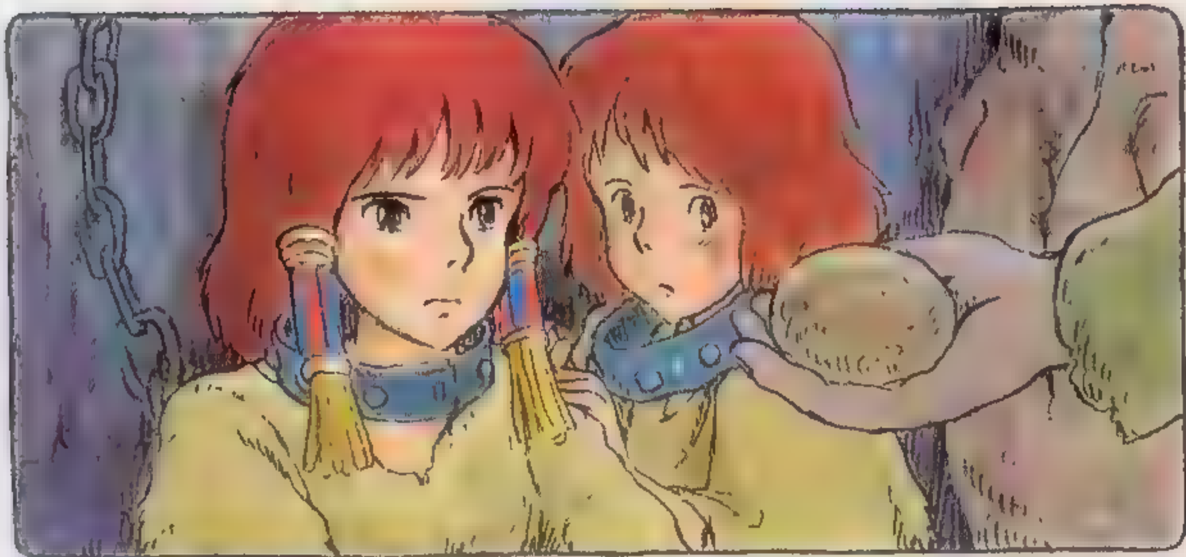
1983








お食べ



旅のお方
そのふたりに
目をつけられる
とはお目が高い





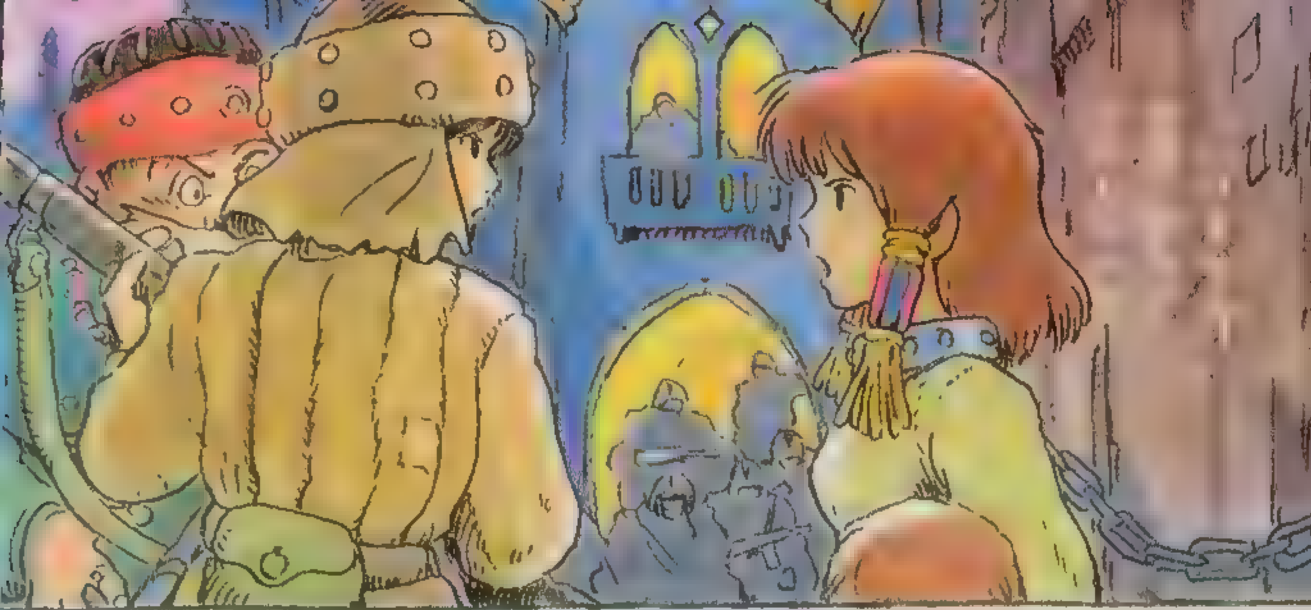


ふたりを自由にして
あげられたら……

シュナは迷った

しかし　ヤックルを
手放しては
旅をつづけられない
宝石はもう無かった





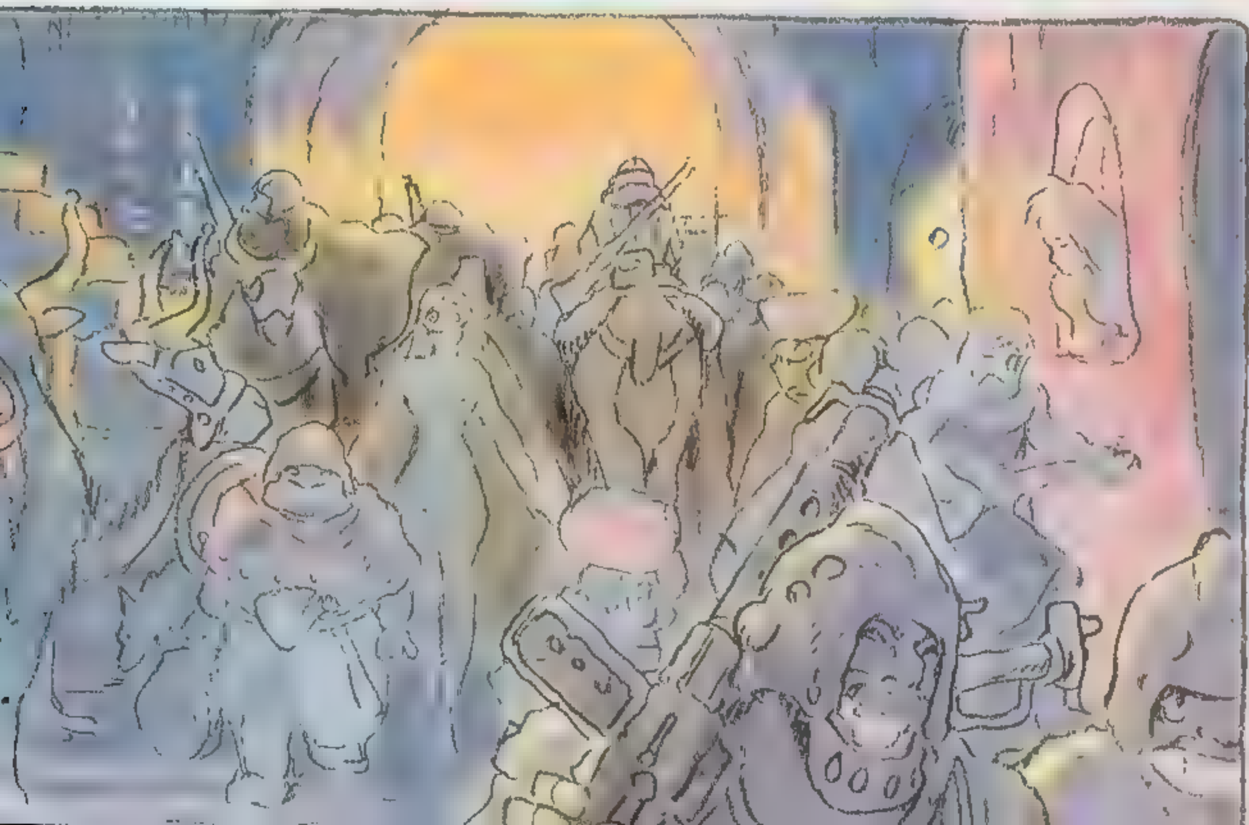
武器を手放せば
あなたも
たちまち狩られて
しまう

それに　わたしたち
王家の者なんかじゃない
だけど
あなたにだって
買われたくありません

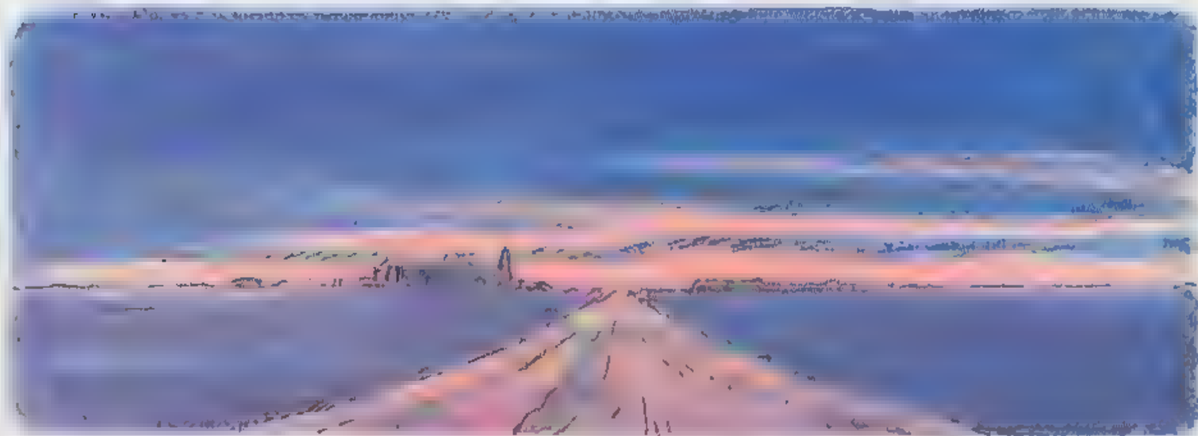
だまれ!!

死にたくなければ
だまってみておれ

行っちまえ
文ナシ野郎め
それとももっと
こいつの悲鳴を
聞かせてやろうか



急に
涙があふれてきて
ぬぐっても　ぬぐっても
とまらなかった

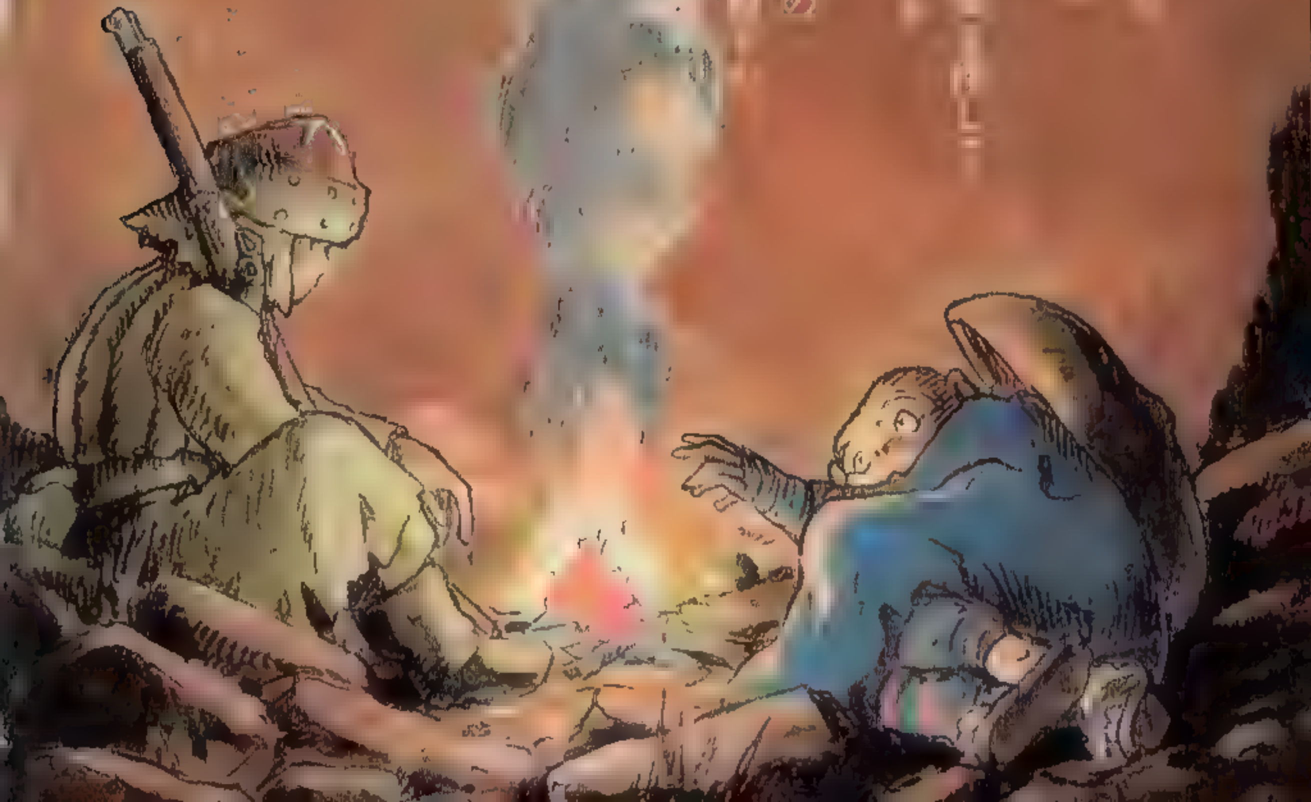


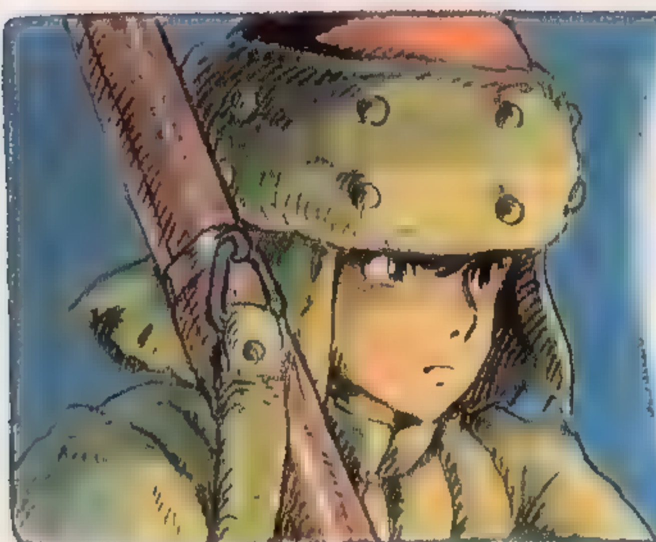

オオッ火じゃなこごえた哀れな老人をあたらせてくれるかな

老人に親切な者へは
福がまいこむぞ
そうか　そうか
ナンをくれるか
ヒヒヒ……

つもりでした

「ヒヒヒ……
それで
自分の旅に





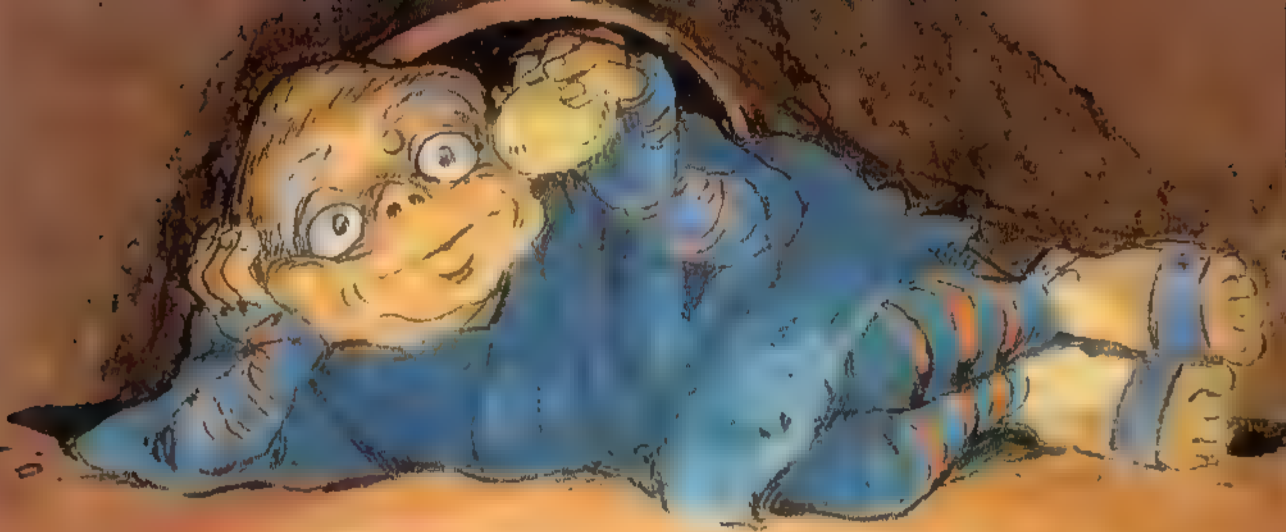




「知らぬでも
ないかの」

そこへ行くにはどうしたと」

とつ……」



「さらに西へ進むがよい
やがて大地は絶壁となって
終わりを告げる
その先は　月が生まれ出で
死ににもどる神人の土地となる」

「神人……？」

「人はかつて金色の種を持っていた
みずから収穫し　みずから種を播き
みずからを生かしたものだったが
いまは種は神人しか持っていない
人は人間を神人に売り
死んだ実をもらうようになった」

「神人は人が近づくのを喜ばぬ
その地におもむき
もどった者はいない」

「行くか
行かぬか
それは そなたが
決めることだ」

老人は
そういうと
眠ってしまった

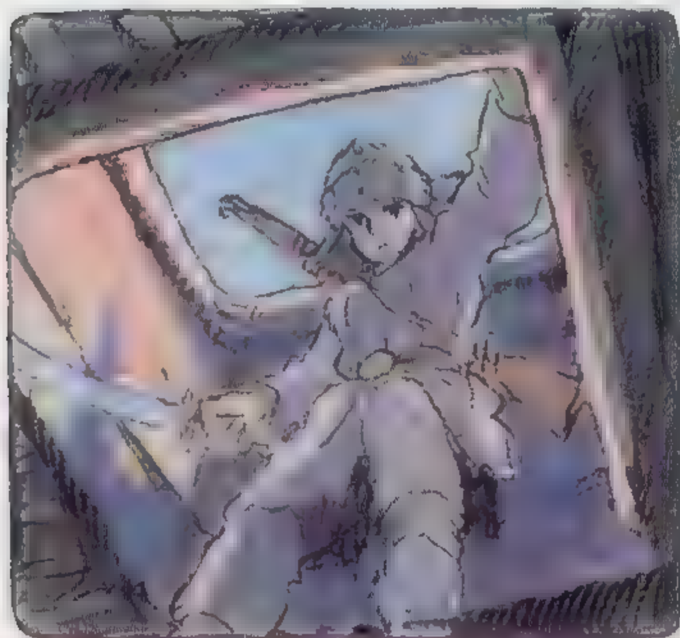


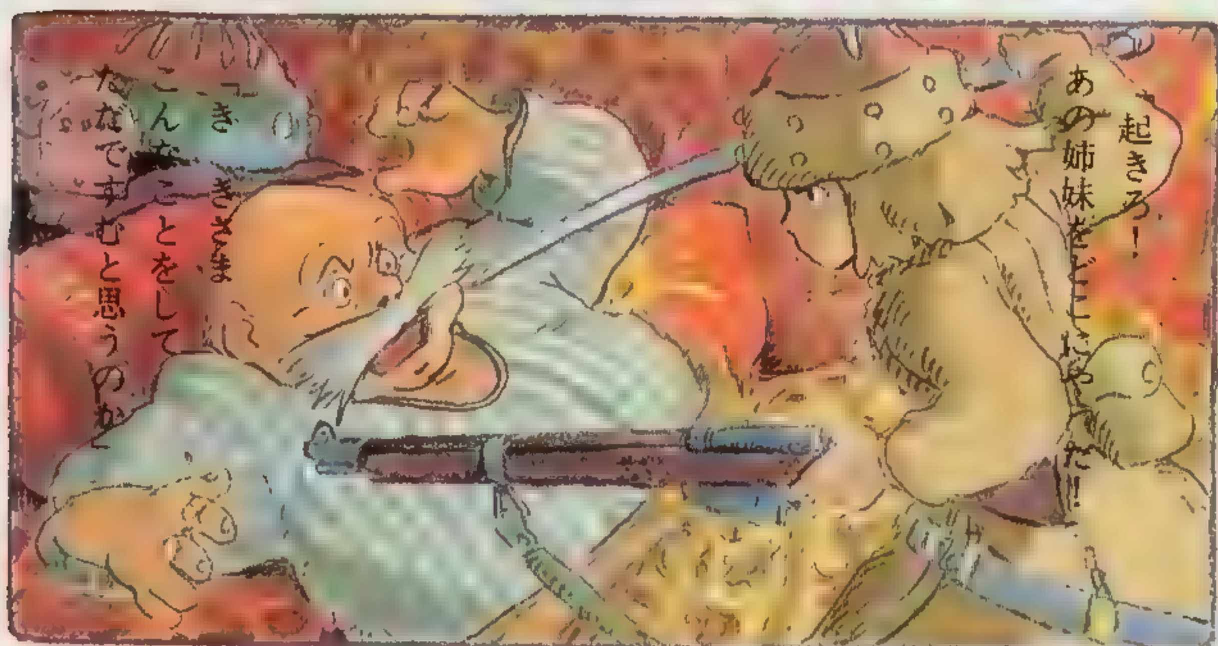
夜明け近く
シュナが目をさますと
老人の姿はもう無かった
シュナは出発した
まず東に向かって……

# 襲撃

大門を固くとざして
まだ眠りを
むさぼっている町に
シュナはとって返した
城壁をよじ登り
昨日の横丁へ行って
みたが　壁に
鎖の輪だけを残して
姉妹の姿は
見えなかった





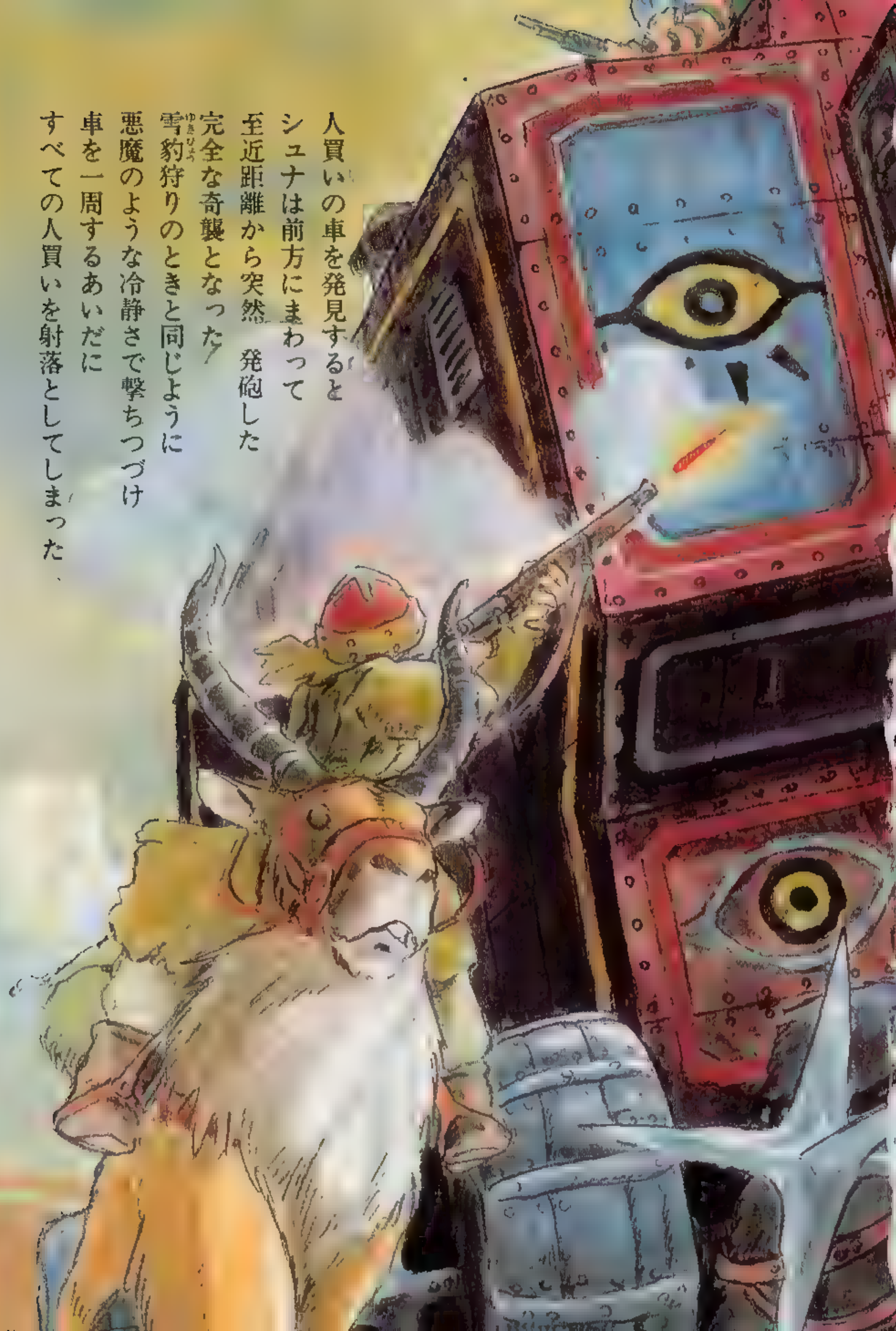


しただか……の日から
本当の……すために

南へ
ヤックルは
風のような
追跡を開始した

シュナは　身のうちに
凶暴な力が
みなぎるのを感じた

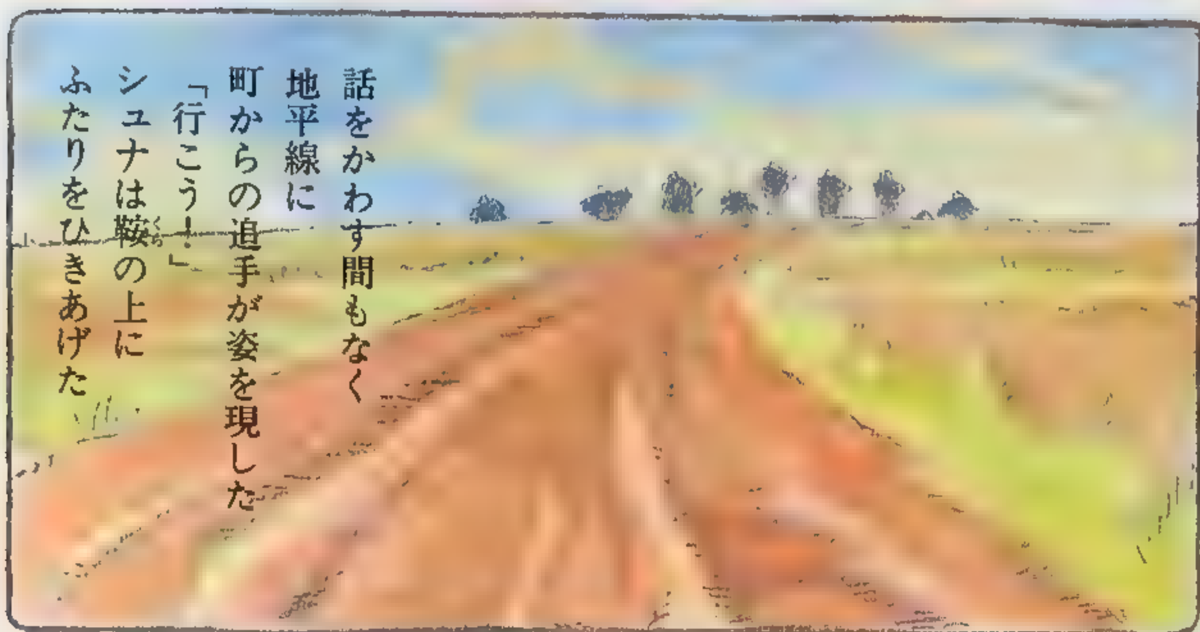



人買いの車を発見すると
シュナは前方にまわって
至近距離から突然 発砲した
完全な奇襲となった
雪豹狩りのときと同じように
悪魔のような冷静さで撃ちつづけ
車を一周するあいだに
すべての人買いを射落としてしまった

シュナは鍵束を
探し出し　鉄の扉を
開いていった
「たとえ一生
追われる身となっても
自由を望む者は
出てくれ」

降りたのはあの姉妹だけで
他の人々は報復を怖れて
立ち上がろうとしなかった

「売り買いによる自由でなく
剣にかけて　あなたの誇りのために戦った
あなたは自由だ」

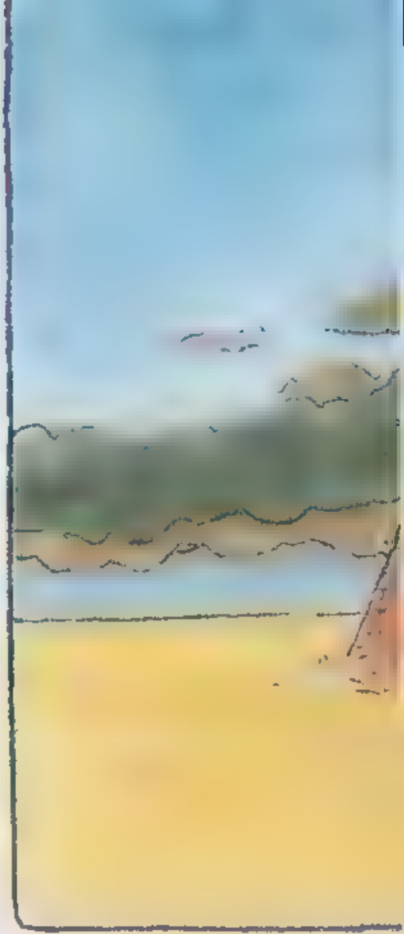



1983.



二人を乗せながら
西をめざしてヤックルは
すばらしい脚力を示し
追手をたちまち視界の彼方に
ひき放してしまった
しかし　シュナは相手が熟練した
追跡者であることに気がついた
彼らはけっして
急ごうとしていない

れるのを待っている
をぬいながら、着実なペースで
て来る追う者の存在を
つけた

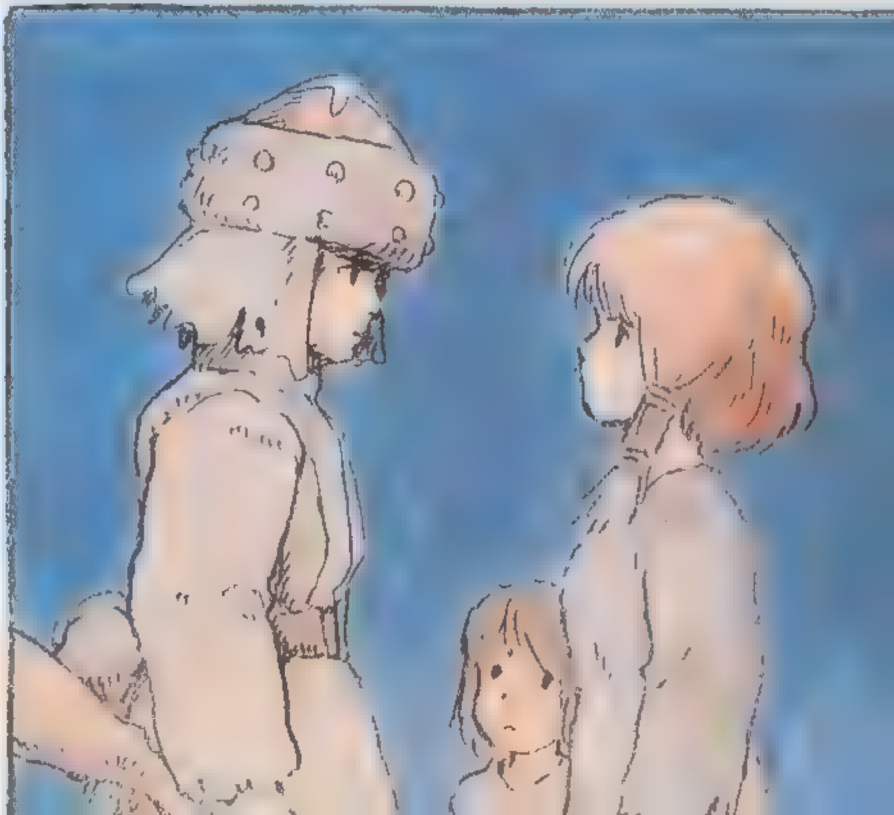




二日後の夜
前方の地面が
突然　無くなった
老人の語った　大地の
果てについたのである

ヤックルが
泡をふいて
すわり込んで
しまった
これ以上三人を
乗せて走れば
死んでしまうだろう

「きみたちふたりなら　ヤックルはまだ走れる
ぼくはここに残って　やつらをくいとめます」
自分たちも残るという少女へ　シュナは
「追跡者を倒したら　そのまま神人の土地へ
行くつもりだ」と語った

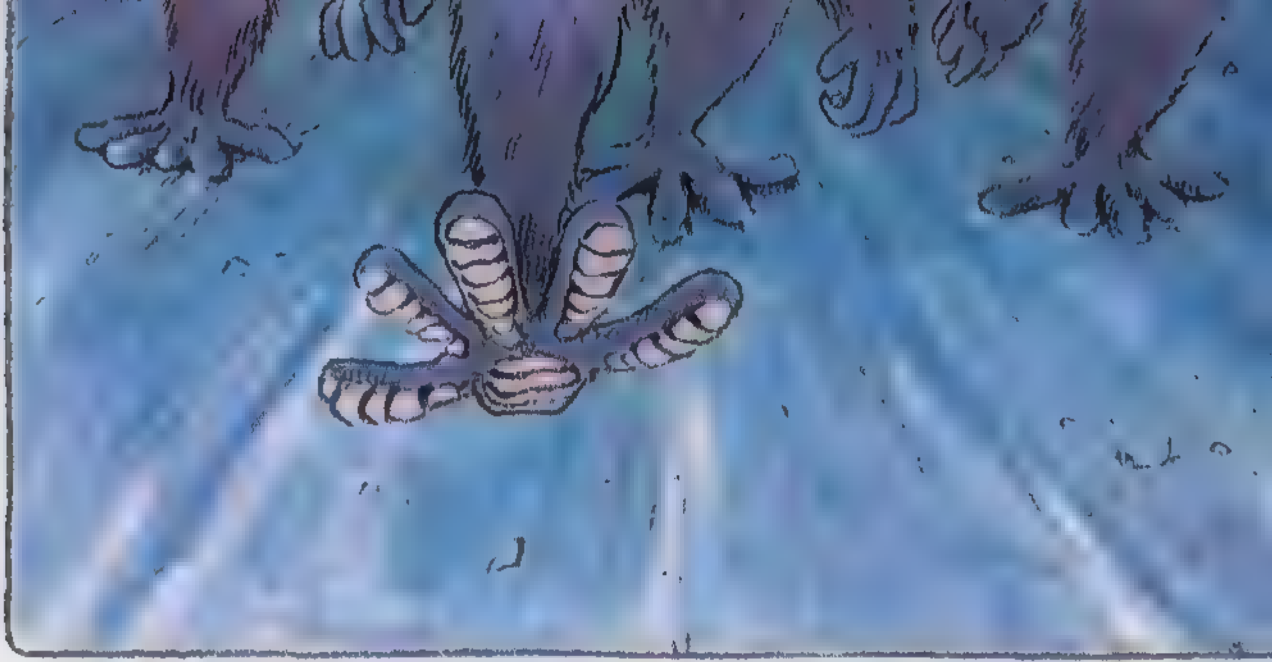


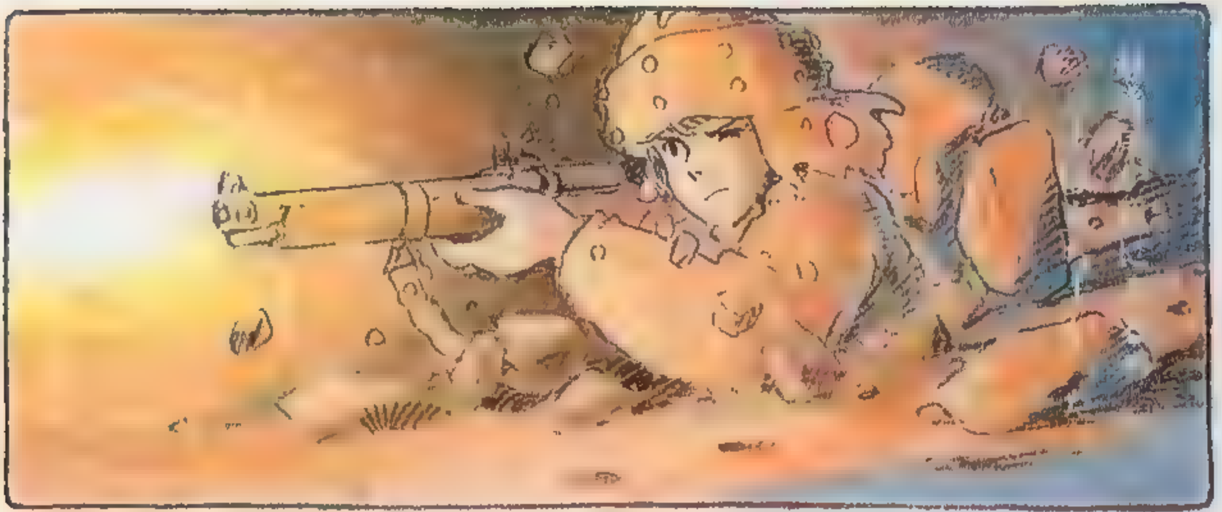
シュナの旅の目的を知って
少女はうつむいた
やがて顔をあげていった
「神人の土地から
もどれたら　かならず
北へ北へと進んで下さい
わたしたちはそこで
あなたが来るのを
いつまでも待ちつづけて
います」
少女の名はテアといった
シュナは食糧と水を半分に
わけた
別れのときが来た
テアと小さな妹は
一度手をふると
もうふり返らずに　足早に
北へと消えて行った

シュナは谷で覚えた
山羊狩りの罠を
はった
崖のふちをかこんで
小石の小さな山を
いくつか作り
薬包をしかけると



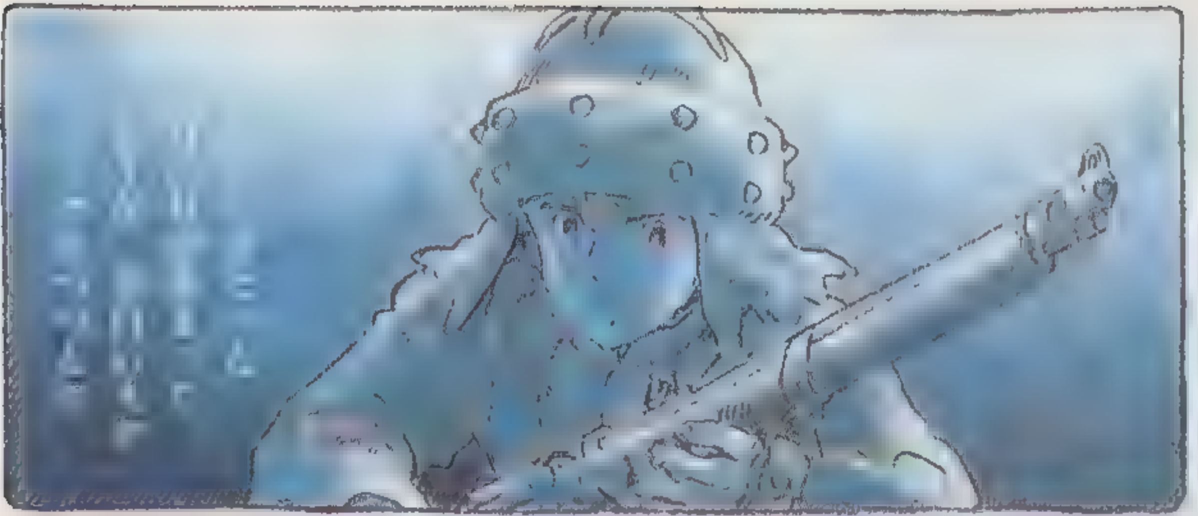
砂を掘って
身をひそめ
静かに待った





銃弾が正確にしかけた薬包を
つぎつぎとうちぬき
轟音と閃光の罠が
しめあげられていく
獣たちはあわてふためき
崖へと走った





それは
輝く巨大な顔で
あった
すばらしい速力で
天空をよぎって行く
月だ

長大な光の尾を引いて
それは　彼方へと消えていった
闇の中に　一瞬対岸が
影となって浮かんだ

神々の土地だ
[illegible]
人が生まれ[illegible]還る地
あそこに[illegible]
求め[illegible]
[illegible]

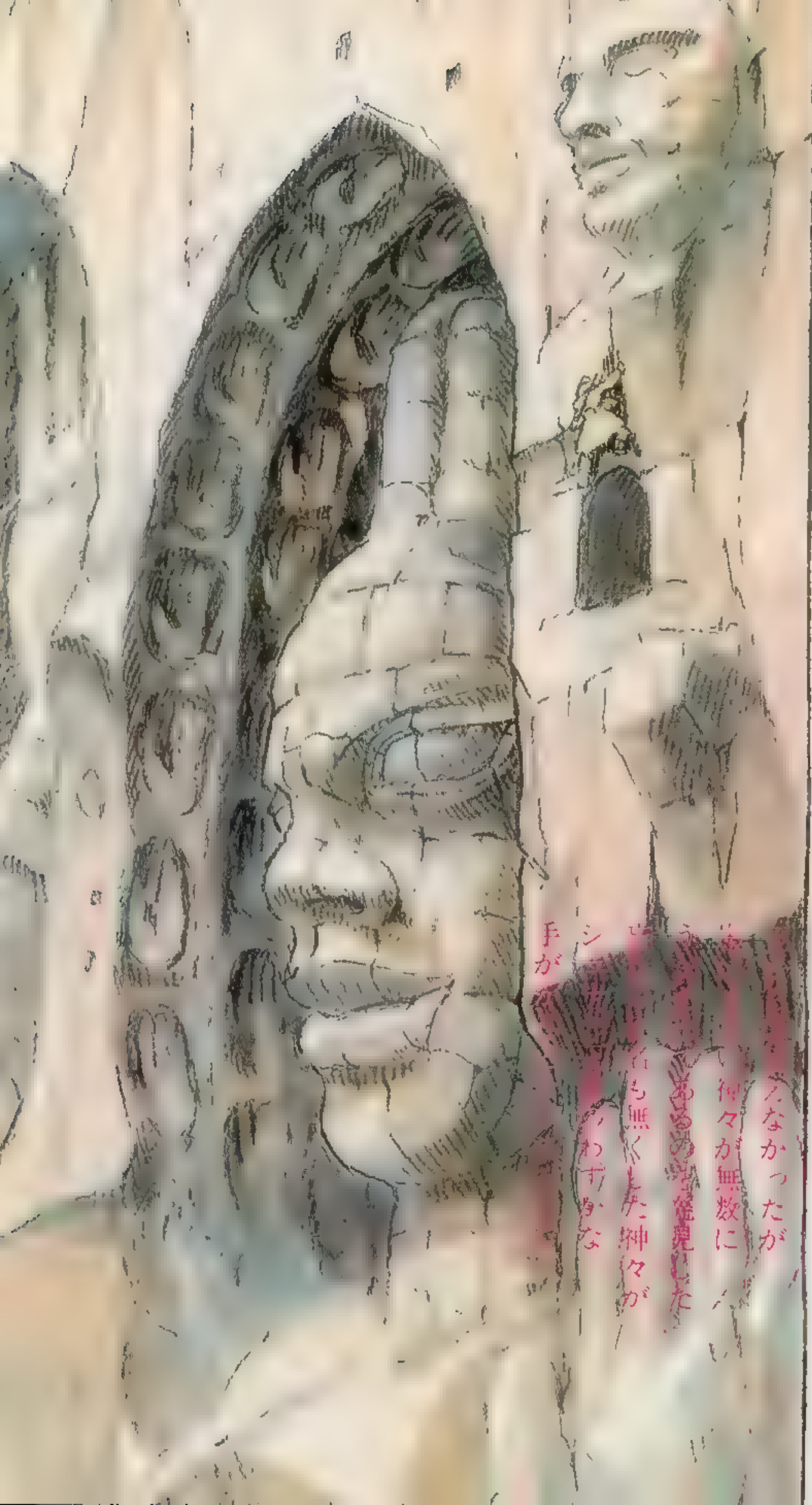


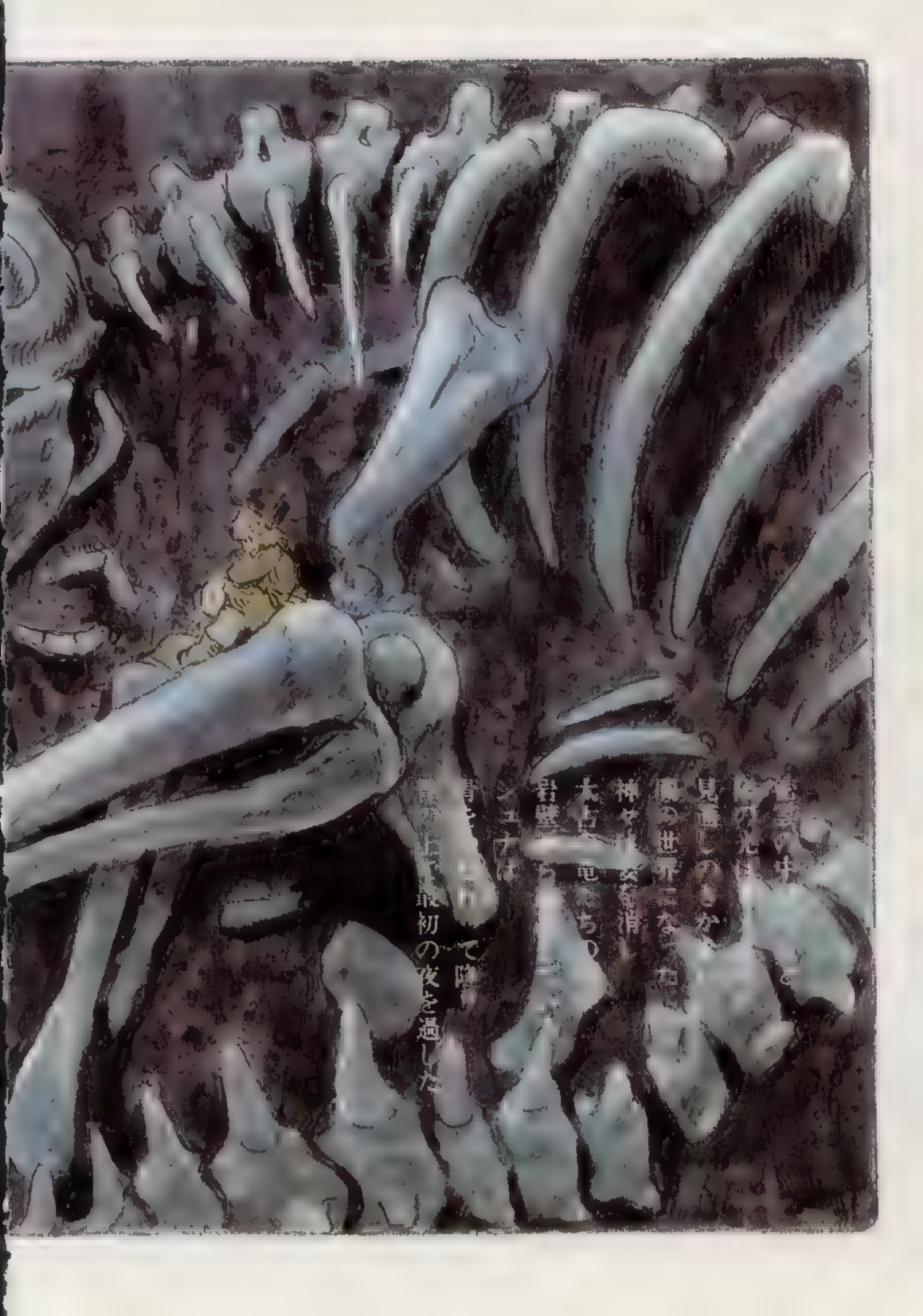


## 神人の土地へ

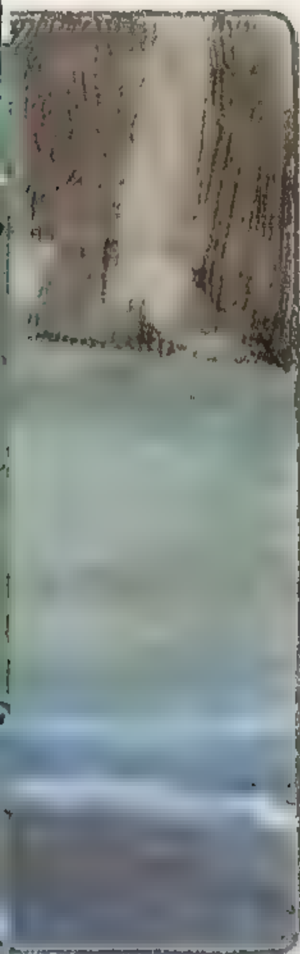


夜が終わり　明るくなったが
対岸は浮遊塵（ふゆうじん）にかくれ
谷底は密雲におおわれて
見ることができなかった
シュナは意を決して
垂直の崖を降り始めた


なかったが
神々が無数に
発見した
神々が
わずかな
シ
手が


最初の夜を過した





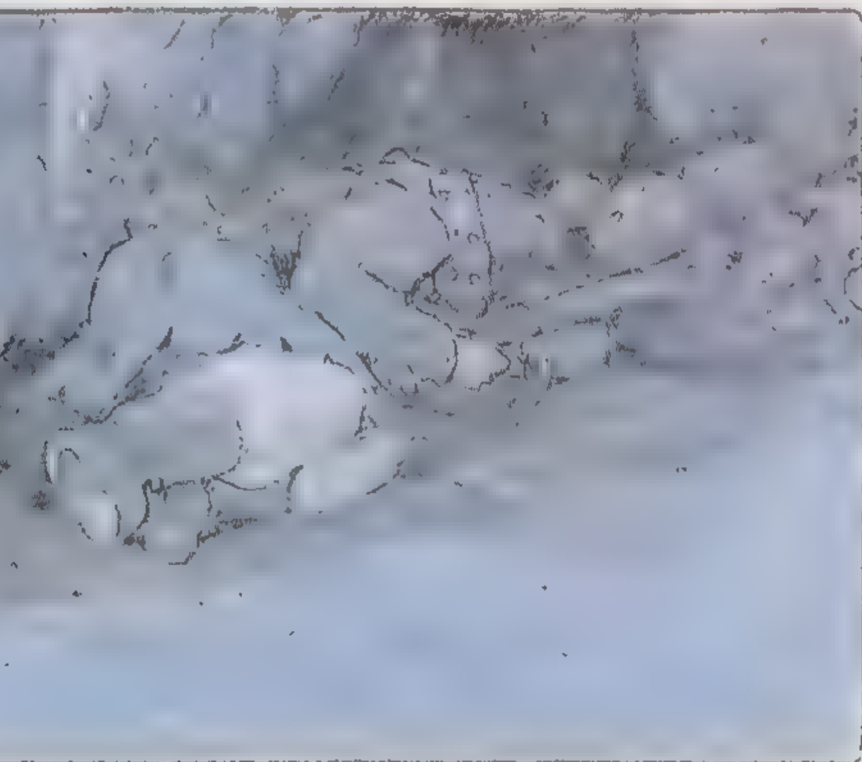


翌日の午后
雲間から陽の光が
瞬だけさし込んで
谷底がはじめて見えた
そこは渚だった





どうすればよいのかわからなかった
疲れきっていたシュナは
よろけながら水に入り
顔と手足を洗った
水は冷たく　苦かった

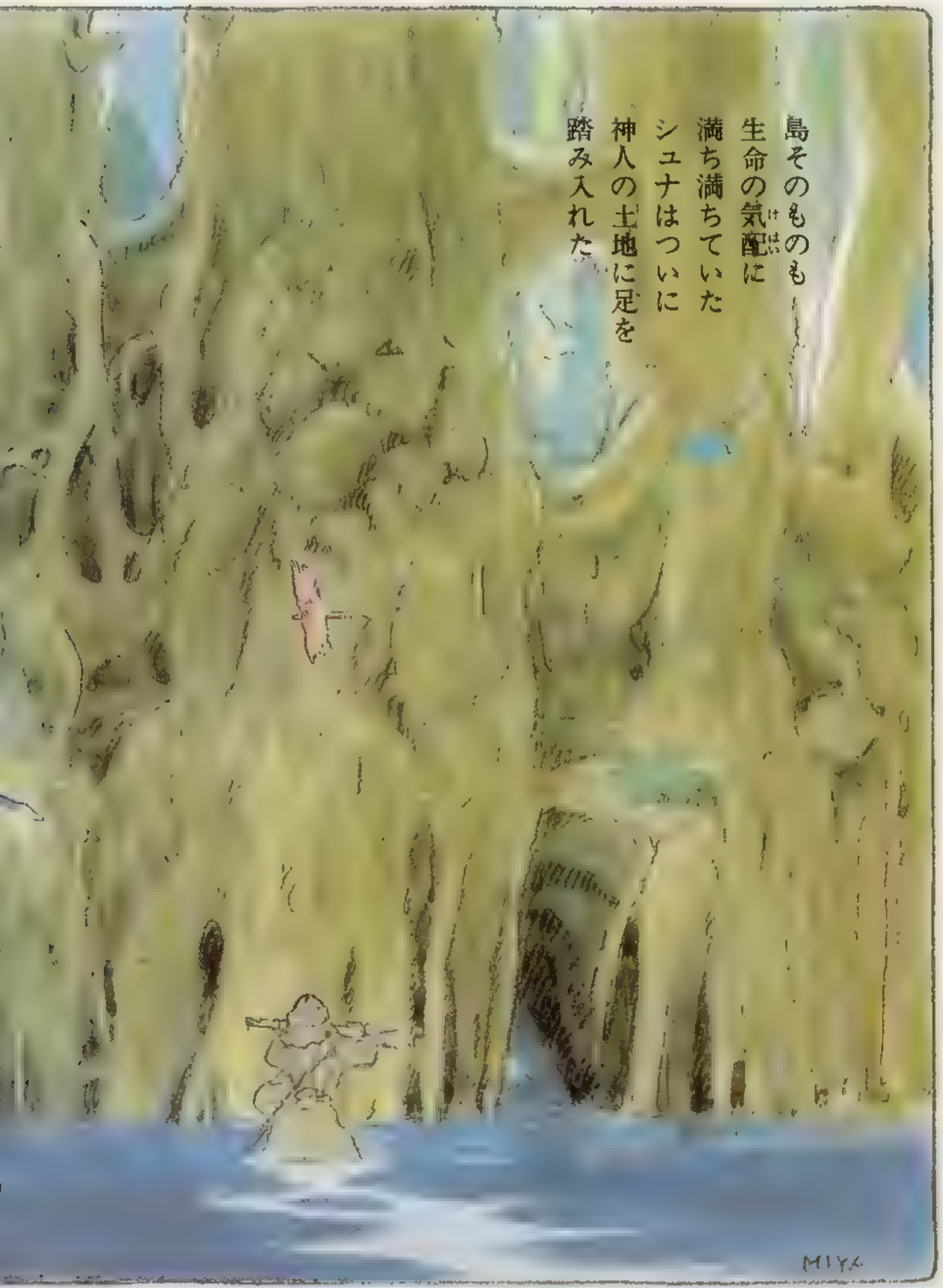


その場にうずくまると
身体中から力がぬけていく
まるで深い海へ
沈んでいくように
シュナは眠った

あたたかい澄んだ水につつまれて
シュナは目覚めた
いつのまにか―潮が満ちていた

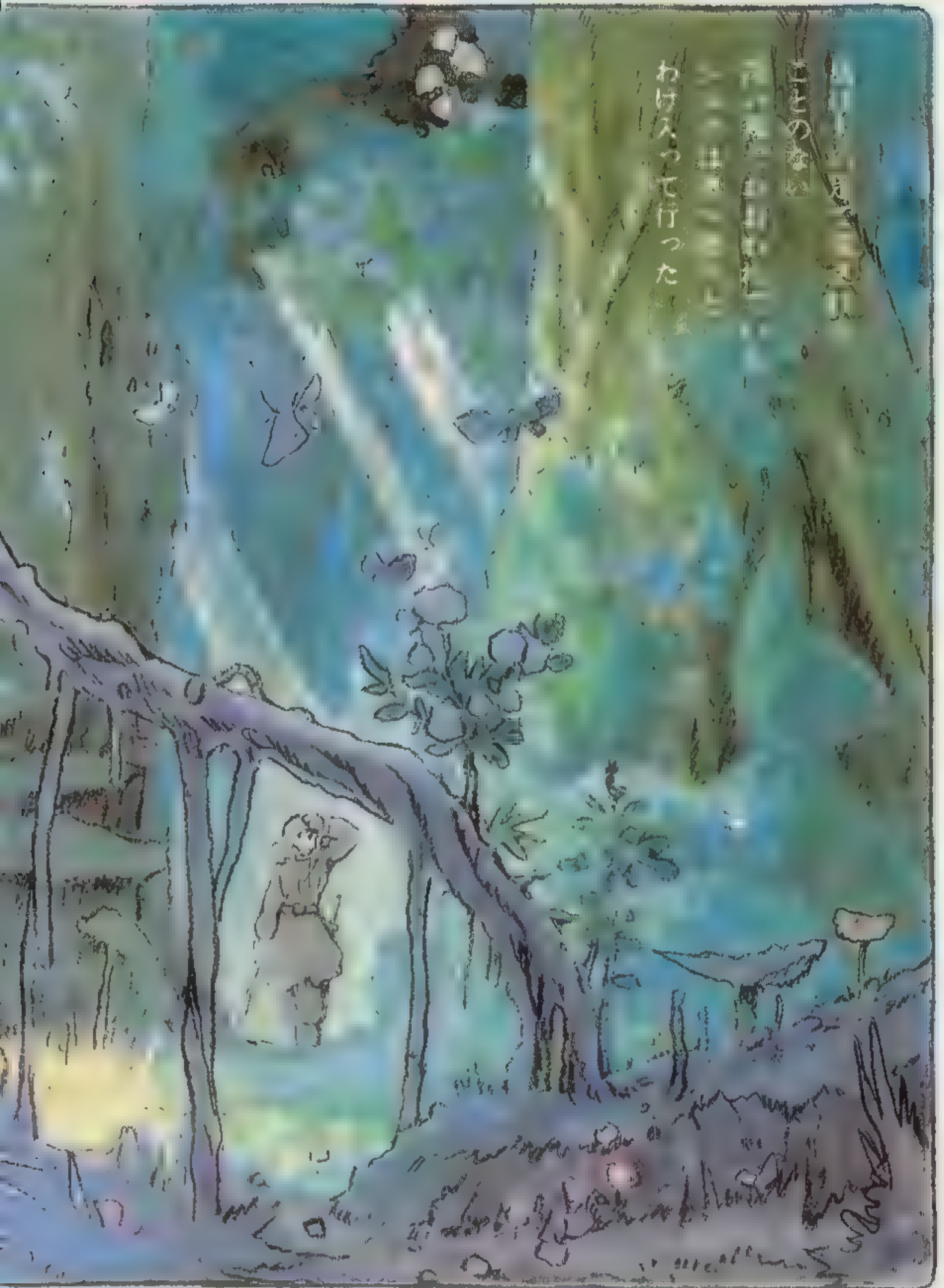
あたりは別世界のように
明るくおだやかだった
昨日は波でかくされていた
砂洲が　姿を見せている


島へと浅瀬づたいに
歩くにつれ
潮がひき始めた
海は生物で満ちていた
ずっと昔に亡(ほろ)びて
しまったはずの種族が
ここでは生きていた



島そのものも
生命の気配に
満ち満ちていた
シュナはついに
神人の土地に足を
踏み入れた
MIYA

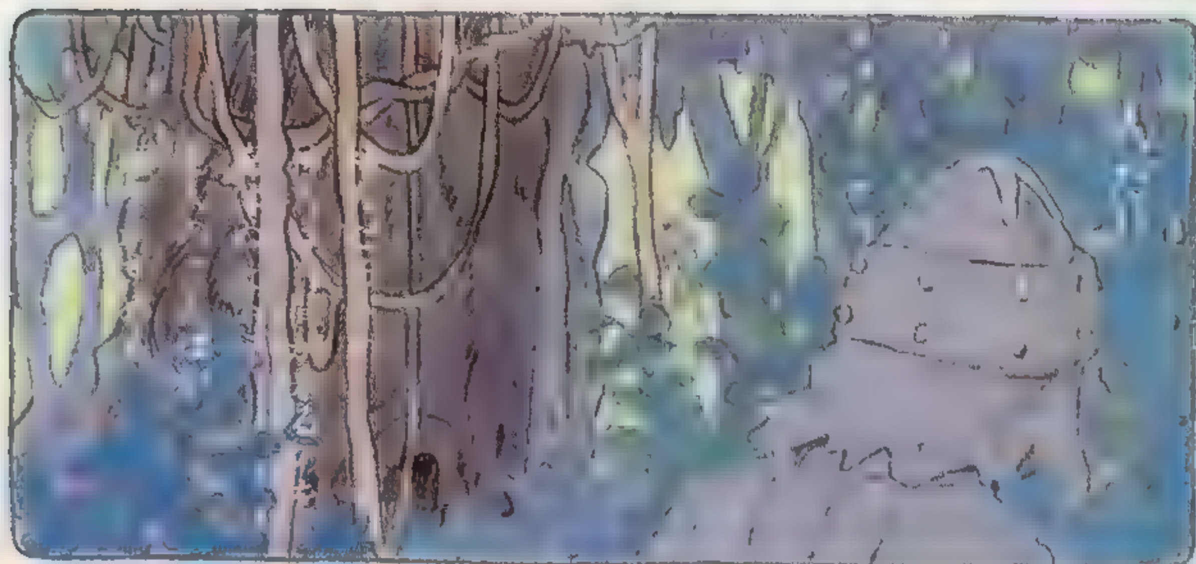



わけ入って行った



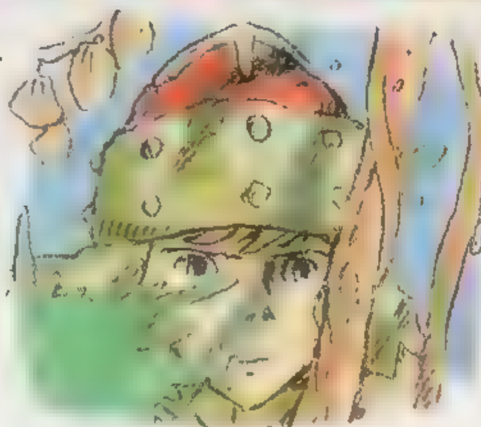
ああ　それにしても
なんて豊かで
平和な世界なのだろう


ここには、
おびやかすものも、
おびやかされるものもいない。
シュナは心の底から
やすらかな想いに、
つつまれました。



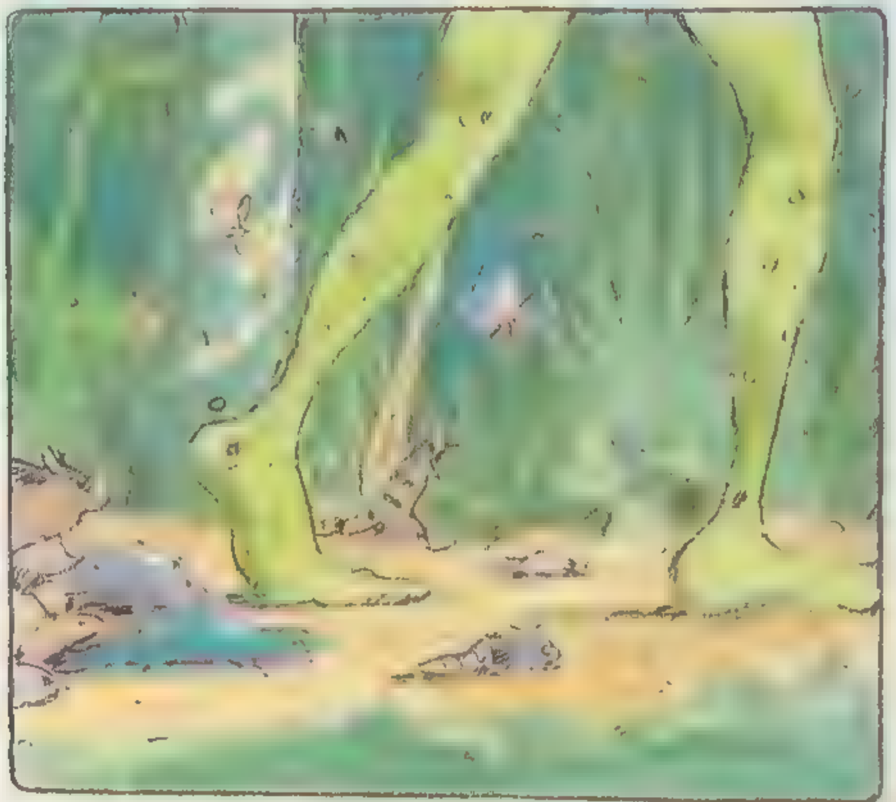
森の中の空地まで来て
巨人はたちどまった

それから
ゆっくり倒れた



シュナは
とてもすべてを
見ていられなかった
小動物の群が巨人を
おおって食べ始めたのだ



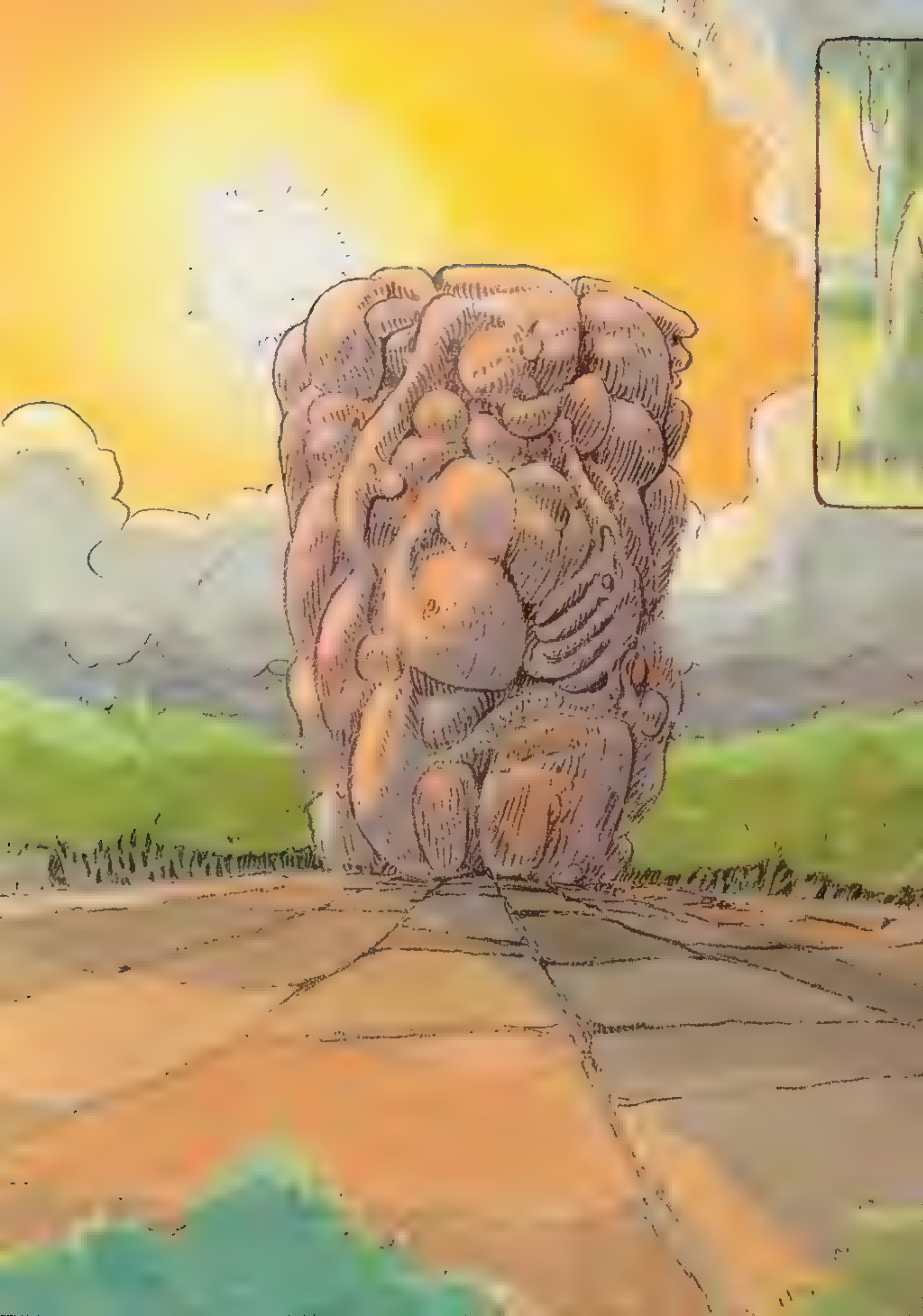


巨人の来た道をたどり始めた途端
またひとりの巨人と出くわした
巨人は目の前のシュナに気づいたふうもなく
おだやかな顔つきで通りすぎる　その巨人は
ケガをしていた　「死にに行くんだ……」
シュナはゾッとしながらつぶやいた

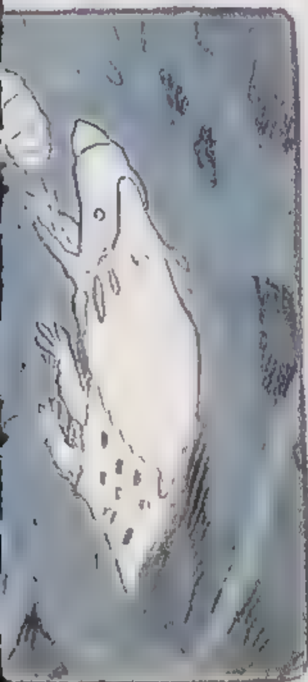
進むにしたがい
さらに多くの巨人たちと
すれちがった
いっせいに休息につく
人々のように
巨人たちは森の中へ
ゆらめきながら消えていった

突然　目の前がひらけた

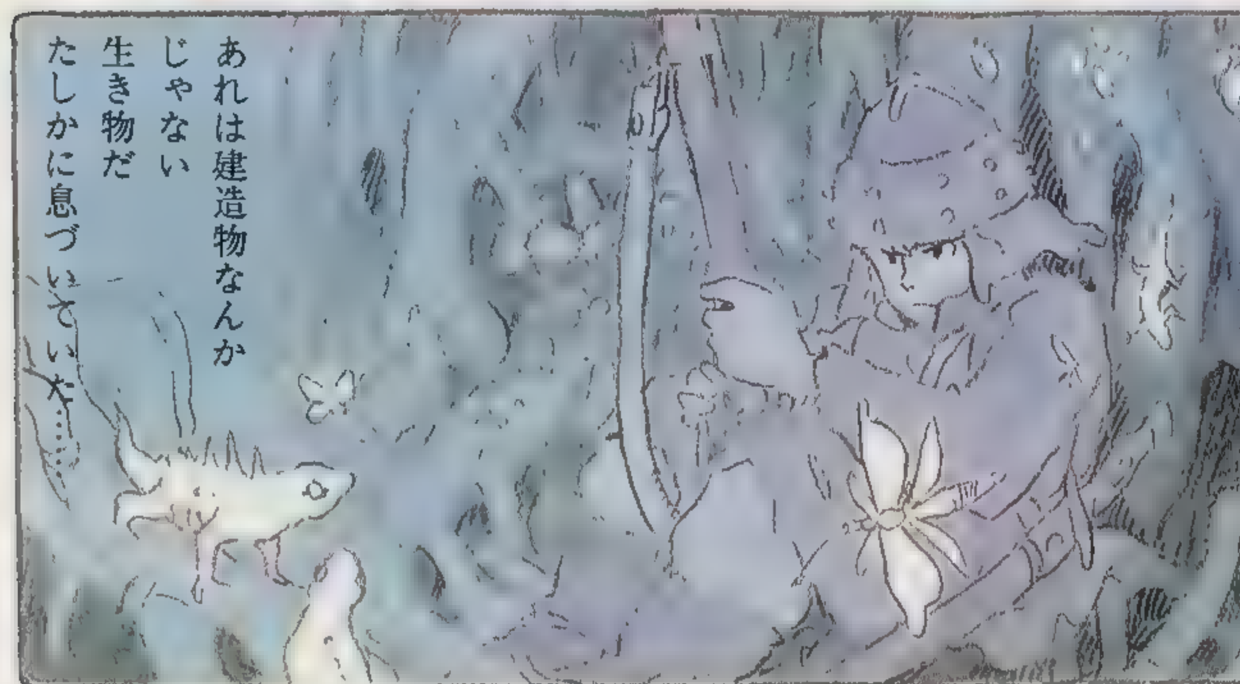
奇怪な建造物らしきものが
はだかの耕地のまん中に
そびえていた
よくたがやされた耕地には
縦横に水路らしきものが
走っている







石でも金属でもなく
ふれると不思議な弾力と
あたたかさがあった


あれは建造物なんか
じゃない
生き物だ
たしかに息づいていた



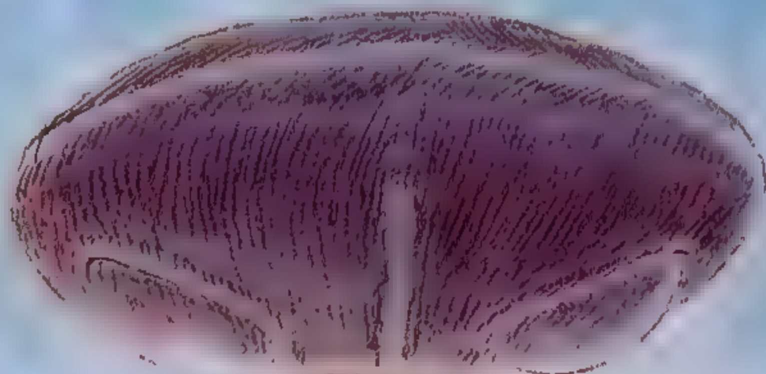
月の口のあたりから
何かがそそがれ始めた
人間だ!!

ほんとうだったのだ

飲み込まれた人々が
巨人に生まれ変わ
それとも耕地をうる
木に変えられてしま
シュナにはわからな
巨人たちはユラユラ

それは生まれたばかりの
みどり色の巨人たちだった







巨人たちは
少しもやすまず
水をすくっては
畑にまきつづけた
朝陽がのぼるころには
もう芽がふき

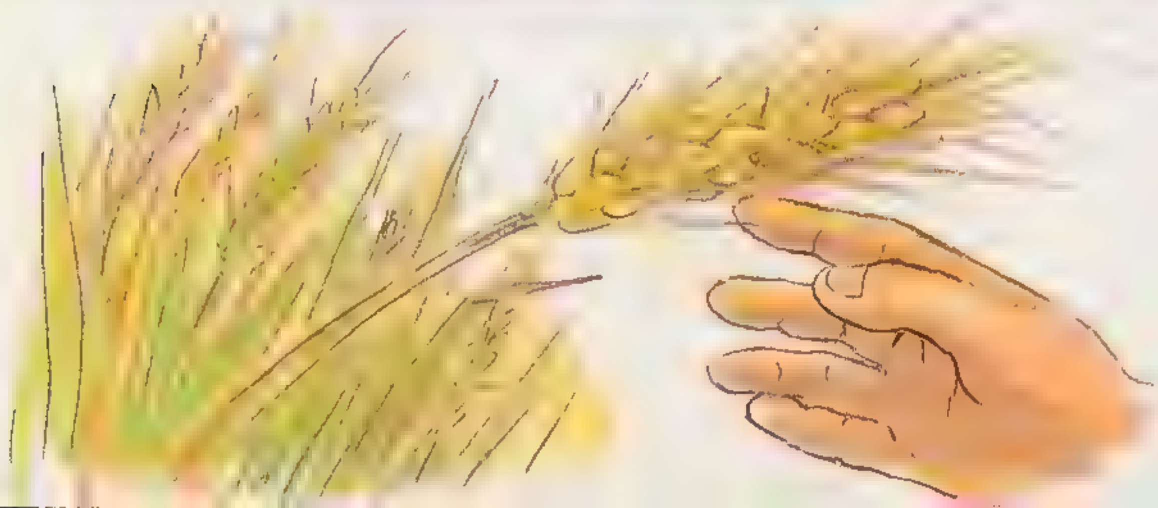
昼には
花が
咲きはじめていた



もボロボ

もうグズグズしては
いられない
ここでは時間の
進み方がちがうのだ

穂がすでに
色づきはじめている







シュナの手が
穂に触れた途端
巨人たちは身をよじり
泣くとも祈るともつかぬ声で
オーオーと叫びはじめた
同時に　シュナの心の中で
「やめろ　やめろ」
とだれかの声が鳴りひびいた
シュナは　かまわず
穂をむしりとった


途端
シュナの身体に
はげしい衝撃が走り
するどい痛みが
心をつらぬいた
歯をくいしばり
穂をにぎりしめて
シュナは走り出した



テア




テアとその小さな妹が
北方のこの貧しい村に
のがれて来てから
もう1年の年月が



ふたりは
ふたりはよく
たった


MIYA


ふたりが
いつも空腹だったとしても
この村の人々のほとんどが
そうだったのだ





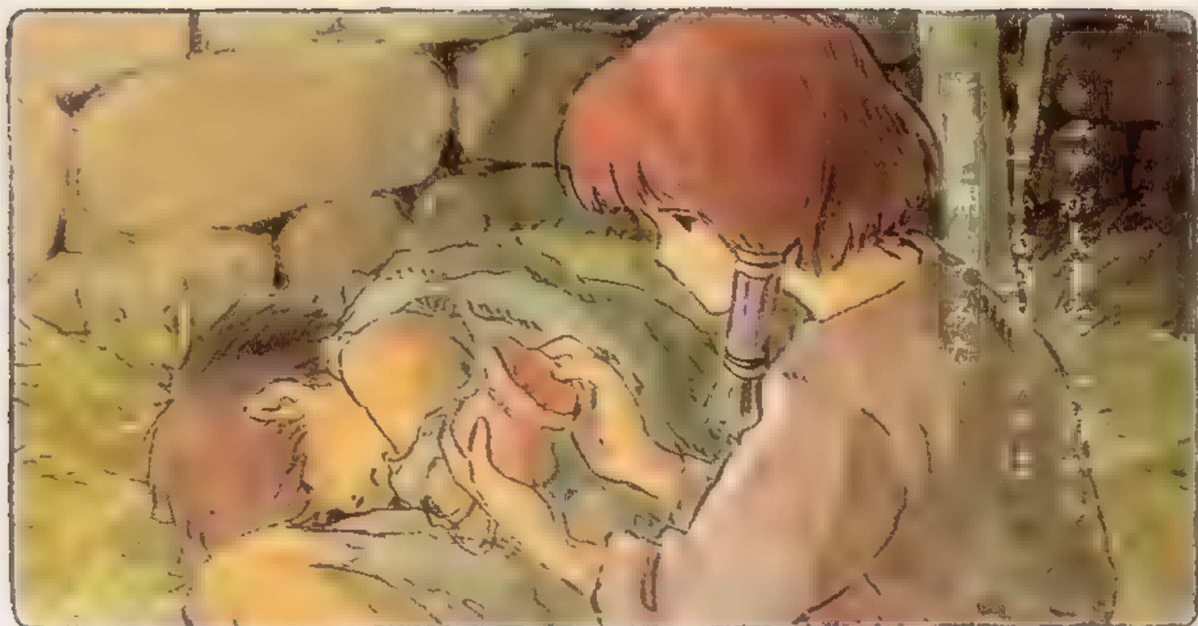
その夜は
いつもより胸さわぎがひどかった
ヤックルも　さかんに鼻をひくつかせて
いつまでもおちつかなかった

突然テアは
助けを求める
シュナの声を聞いたような気がした

テアは ヤックルに
鞍をおく間もおしんで
南への道を下った
村の入口まで来たとき
その先には人家のない
かれ谷への道を進んで行く
幽鬼のような人影を見た

テアはシュナの名を呼んだ
シュナはゆっくりふり向いた
その瞳はうつろだった

テアは自分たちの寝起きしている
物置きに
シュナを連れて行った
シュナはすべてのものを
失っていた
記憶も　ことばも　名まえも
感情すらも……
火をおそれて
暗がりにうずくまり
ガツガツと
食べるだけだった



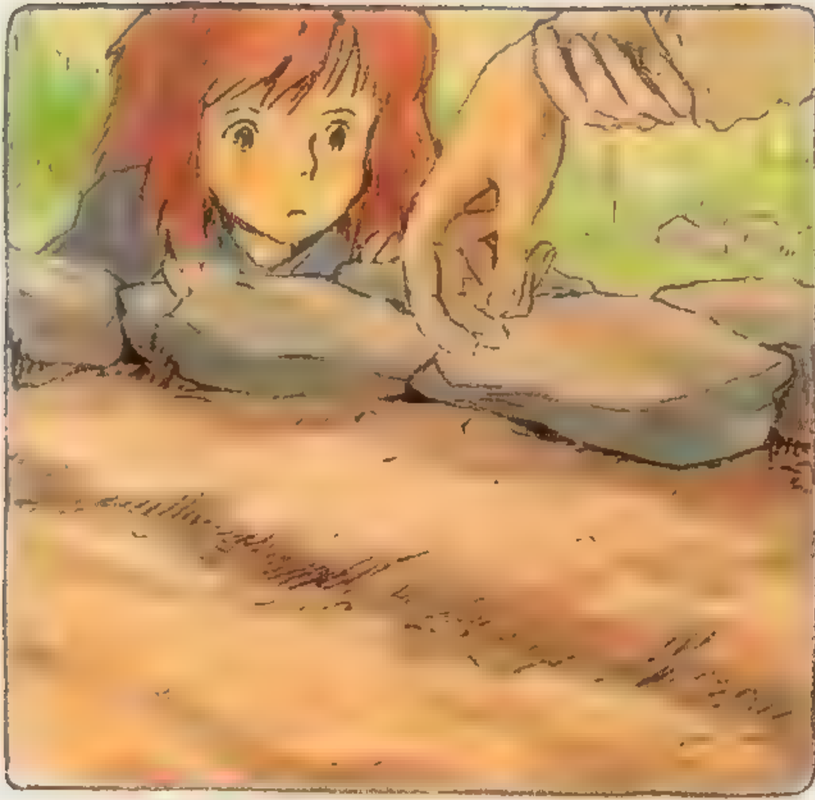


もう冬だった
長い暗い季節を
シュナは食べるとき以外は
うずくまって
眠りつづけた
テアは　老婆にも村人にも
シュナのことを
告げなかった

おそい春が
めぐって来た
ある朝早く
テアはシュナを
外へつれだした

人[illegible]
荒地を耕して
小さな畑を作り
掘り出した石を積んで
シュナのための
[illegible]家を造った


毎日
まだ人が眠ってい
テアは水と食物を
りが早い
と文句をい
けたか
テアは自分の分をさいて
運びつづけた



シュナは袋をにぎりしめて
なかなか　種を播こうとしなかった
テアは忍耐強く　ゆっくりと教えた
シュナは一度播いた種を
夜の内に掘りかえして
袋にもどしたりした



そのあいだにも
テアはいままで以上に
働いていた
シュナの分も　収穫を
ふやさねばならない

家の仕事が終わると
夜ふけまで　紡いだ糸で
布を織った

ある朝

みどり色の芽を見てテアの小さな妹が
明るい声をたてて笑った
人狩りに国を焼かれて以来
一度も笑ったことのない子が
いま　クルクルと回って
踊っていた

そのとき以来
シュナの顔にも
かすかな微笑が
もどって来た



夏至の祭が近いある日
老婆がテアをよんだ
「おまえも年ごろになったし
わしも力の強い
働き手がほしい」
村の若者の中から
ムコを選べ
というのだった
「いやなら家を
出て行くがいい」
「まだ早い」という
テアのことばは
受け入れ
られなかった
テアは祭の前の
晩までに
織りあげた布で
シュナの服をぬいあげた




老婆は 自分の若いころの晴着を着せて
テアを飾りたてた
テアの姿を見て 村中の若者がどよめいた

テアはいった
わたしたちのヤックルを乗りこなせる方を
夫とします

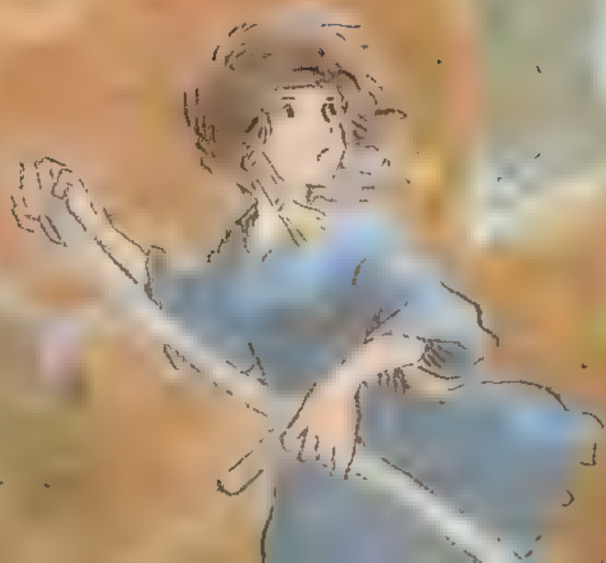
誇り高いヤックルは
上手に角を使って
乗り手をつぎつぎと
降り落とした

村中が笑い声に
つつまれてしまった

さいごの求婚者が
失敗したとき
テアの妹が　見慣れぬ
若者の手をひいて進み出た
若者は　ヤックルの毛で
織った服を着ていた
村人にはすぐわかった
主人とその忠実な家畜が
出会ったのだと……
若者は　ひらりとヤックルにまたがると
村人の輪をとびこえて
走り去ってしまった
老婆はくやしがったが
村人は満足して
家へ帰っていった

あるよく晴れた日
テアは遠い牧場に
草刈りに出ていた

急に冷たい風が
ふきぬけると
黒い雲が山から
おしよせて来た



北国の短かい夏が来た
小さな畑のみどりは
すこやかにしげり
それにつれて
シュナの顔も
しだいに明るく
なっていった

テアは走り出した
やがて
雷とともに氷の粒を
まじえた横なぐりの雨が
降りはじめた

テアはシュナをはげまし
布を広げて畑をまもった
大粒の雹がはげしくふたりをたたき
大地の草をなぎたおした
あたりはまっ暗となり
嵐は轟々(ごうごう)と吹きあれた……



ふたりは畑をまもりとおした
嵐が去って青空が
顔をのぞかせたとき
テアは自分の名を
呼ぶ声を聞いた





シュナが
ことばを
とりもどしたのだ

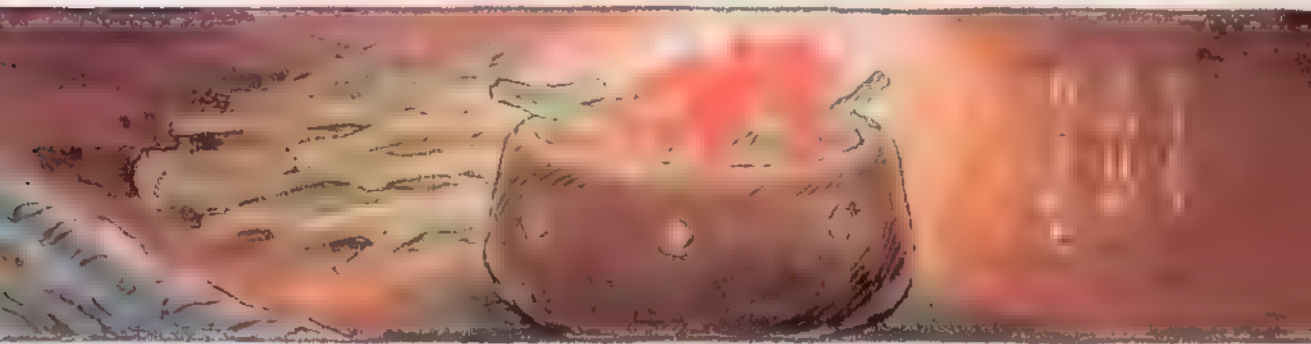
テアの涙が
せきをきって
あふれ出た
村を焼かれたときから
けっして泣かなかった
娘が　シュナを抱いて
はげしく泣いた

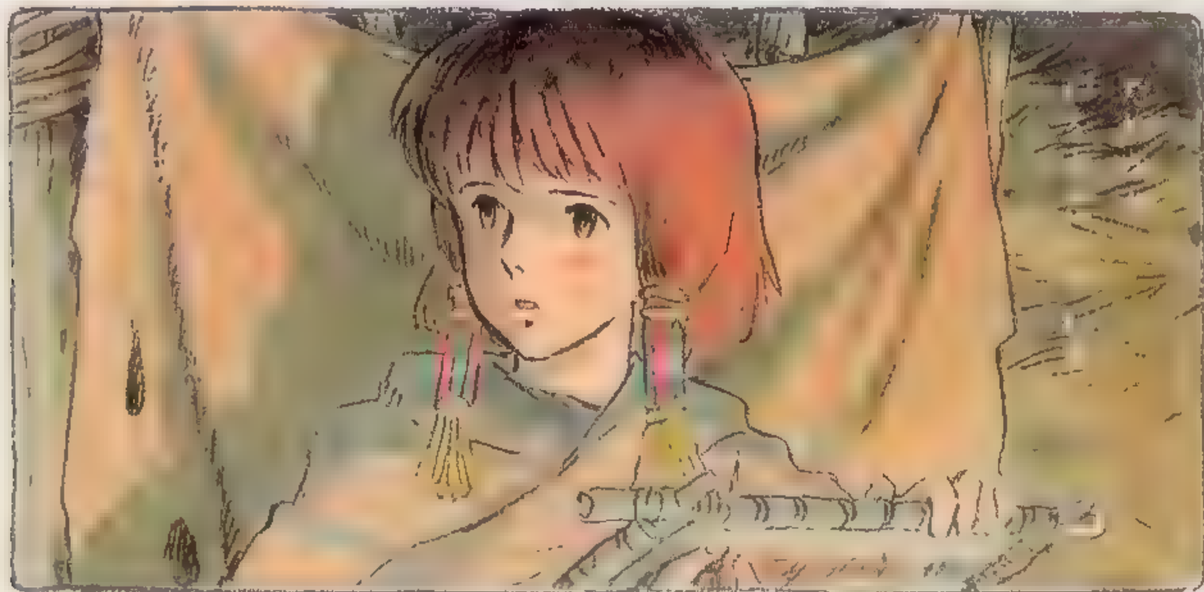


作物が
ゆるやかに
色づき
みのるように
シュナは
回復していった



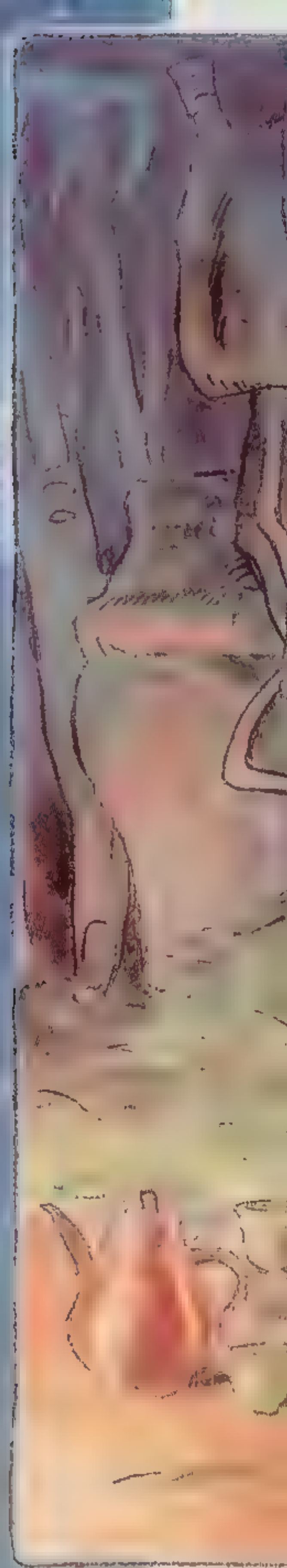

秋……






MIYA





は天空をかけめぐり
りは地を徘徊している

の試練をふたりは

ふるさとの谷にもどるために
さらに1年　シュナはその地にとどまった
村人とともに来襲する人狩りと闘い
砂漠に追い払ったこともあった
そのあいだに麦の畑は広げられ
まえの収穫は
つぎの大きな収穫になっていった

出発する日が来たとき
金色の麦の種の半分は
村の人々に残すことができた

人々は別れをおしんだ
村の若者をムコに
できなかったことを
なげきつづけた老婆も
亡夫の長銃を
テアにくれるのだった




'5 1983

シュナの旅はまだ終わらない
谷への道は遠く
困難はつづくにちがいない
けれども
その物語は
また別の話として
語られるべきであろう

おしまい



# あとがき

この物語は、チベットの民話「犬になった王子」（賈芝・孫剣冰編　君島久子訳　岩波書店）が元になっています。穀物を持たない貧しい国民の生活を愁えたある国の王子が、苦難の旅の末、竜王から麦の粒を盗み出し、そのために魔法で犬の姿に変えられてしまいますが、ひとりの娘の愛によって救われ、ついに祖国に麦をもたらすという民話です。

現在、チベットは大麦を主食としている世界唯一の国ですが、大麦は西アジアの原生地から世界に伝播したものだそうです。だから、王子が西に向かって旅をしたという内容は歴史と符合しています。ただし、この民話は本当にあった出来事というより、チベットの人々が作物への感謝を込めて生み出した、すぐれた物語と考えるべきでしょう。

十数年前、はじめて読んで以来、この民話のアニメーション化がひとつの夢だったのですが、現在の日本の状況では、このような地味な企画は通るはずもありません。むしろ中国でこそ、アニメーション化すべきだなどとあきらめていたのですが、今回徳間書店の人々のすすめもあって、何らかの形での自分なりの映像化を思いたったしだいです。

一九八三年五月十日(火)

宮崎　駿

アニメージュ文庫



# シュナの旅



V-028

1983年6月15日 初刷
1989年12月1日 21刷

著者 宮崎駿
発行者 尾形英夫
東京都港区新橋四—一〇—一〒一〇五
発行所 株式会社徳間書店
電話〇三(四三三)六二三一(大代)
振替 東京四—四四三九二番
印刷 大日本印刷株式会社
製本

〈編集担当 柳沢 因〉

ISBN4-19-669510-8C0174(乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

★この本を読んでの感想を右記までおよせ下さい。また、著者へのお便りもお待ちしています。